松江城調査研究集録1

2013年12月

松　江　市

目　　次

報告集　松江城調査報告会 …… 1

報告１　「天守祈祷札の概要について」

松江市史料編纂室長　稲　田　　信 …… 2

報告２　「文献資料上の祈祷札について」

米子工業高等専門学校名誉教授　和　田　嘉　宥 …… 11

報告３　「祈祷札の打付け位置について」

松江市松江城国宝化推進室長　卜　部　吉　博 …… 24

報告４　「天守調査と祈祷札のもつ意義について」

神奈川大学名誉教授　西　　和　夫 …… 31

パネルディスカッション記録 …… 35

コーディネーター　　東京文化財研究所長　亀　井　伸　雄

パネリスト　　西　和夫、和田嘉宥、稲田　信、卜部吉博

天守祈祷札の類例調査について　－丸亀城天守木札－

松江城国宝化推進室 …… 55

表紙　松江城天守祈祷札２枚（松江市文化財（歴史資料））

写真右　「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札

写真左　「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札

この祈祷札は、城戸久氏（故人、名古屋工業大学名誉教授）が、1966年（昭和41年）４月30日発刊の『佛教藝術』に発表された「松江城天守」に、同氏が1937年（昭和12年）７月に松江城天守を調査した際に、４階に所在したことを写真付きで記録されたものである。

同氏は、この中で、1950年（昭和25年）から1955年（昭和30年）にかけて実施された解体修理工事の報告書に、この祈祷札に関する記録がないことを知り、あえてこの貴重な歴史資料の存在を紹介するために記したと述べられている。

天守の創建時期に関わる貴重な資料であるにも関わらず、城戸氏が1937年に確認された以降、その所在は不明だったが、2012年（平成24年）５月に教育委員会文化財課史料編纂室のおこなった松江市内寺社史料調査の過程で、松江城地内の松江神社から発見されたものであり、いずれの祈祷札からも、「慶長十六」、「正月吉祥日」などの墨書が確認された。

その後、松江城国宝化推進室のおこなった調査により、この２枚の祈祷札が、天守地階の２本の通し柱に打ち付けられていたことが判明したが、このことにより、松江城天守の完成時期が1611年（慶長16年）正月以前であることが確実となったのである。

報告集　松江城調査報告会

「松江城調査報告会」は、松江市の取り組んでいる松江城調査の現状について報告し広く市民や専門研究者、行政職員を対象にその成果を還元するとともに、議論を深めて新たな調査・研究の進展に資することを目的に開催した。

この報告集は、平成25年３月19日（火）に松江市市民活動センターにおいて開催した本報告会の記録であり、当日の録音記録と配布資料をもとに、４件の報告とパネルディスカッションの要旨をまとめたものである。

報告１	「天守祈祷札の概要について」	松江市史料編纂室長	稲　田　　信
報告２	「文献資料上の祈祷札について」	米子工業高等専門学校名誉教授	和　田　嘉　宥
報告３	「祈祷札の打付け位置について」	松江市松江城国宝化推進室長	卜　部　吉　博
報告４	「天守調査と祈祷札のもつ意義について」		
		神奈川大学名誉教授	西　　和　夫
パネルディスカッション記録			
	コーディネーター	東京文化財研究所長	亀　井　伸　雄
	パネリスト	西　和夫、和田嘉宥、稲田　信、卜部吉博	

報告１　「天守祈祷札の概要について」

松江市史料編纂室長　稲　田　　信

失礼いたします。松江市教育委員会文化財課史料編纂室の稲田でございます。

私からは、昨年５月21日に発見されました松江城天守創建に関わります祈祷札について概要をご説明申し上げます。

この祈祷札につきましては、昨年５月に史料編纂室が調査いたしまして、松江市で探していた祈祷札であることが確認できたわけですが、この祈祷札の再発見に当たりまして、関係の皆様のご協力、ご尽力をいただいたことに、まずもってお礼を申し上げたいと思っております。

さて、この祈祷札ですが、前のスクリーンに写真を掲げております。私の報告は、お手元に「松江城天守創建に関わる祈祷札について」と記した資料を用意しております。これは、「松江城研究」という研究報告書の中で報告したものですので、これを用いてご紹介をしたいと考えております。

この祈祷札でございますが、これは昭和41年に城戸久先生という名古屋工業大学の学長を務められた方が、「佛教藝術」という本の論文の中に記されたもので、昭和12年に城戸先生が松江城の実測調査をされた折に、天守４階に２枚の祈祷札があったというものです。城戸先生の書かれた文章につきましては、資料１頁の右下の枠の中に書いております。この報告では、城戸先生が昭和12年に見つけられた時には祈祷札が２枚あったということ、その２枚とも慶長16年という年号が記されていたということ、１枚は肉眼でも書かれた文字が見えたが、もう１枚は、その時には見えなかったということなどが記されております。

城戸先生もこの中で書いていらっしゃるのですが、松江城天守は昭和25年から30年にかけまして大規模な解体修理がなされ、それによって、「重要文化財松江城天守修理工事報告書」という大変立派な報告書ができました。しかし、この報告書の中にはこの２枚の祈祷札については一切書かれておらず、また、この２枚についてはその所在が明らかではなかったということで、あえて城戸先生は昭和41年に記されたということでございます。

この祈祷札につきましては、現在、東京の国文学研究資料館が所蔵している「御城内惣間数」という文献にも記されており、このことは、今日ご報告される和田嘉宥先生もかねてよりご指摘されていらっしゃいました。

さて、この２枚の祈祷札が、どのような形状であるのかということを、ご紹介しておきたいと思います。

資料の２頁に、⑴「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札としております。こちらの方は、前のスクリーンの写真を見ていただきますと向かって右側で、高さが少し低い方、これがこの⑴の祈祷札です。この祈祷札は、高さが約70センチで、上の幅が14.2センチ、下の幅も14.2センチということで、

厚さは0.7から0.85センチというものです。

この木で作られている祈祷札ですが、材質は杉でございます。作り上げられました痕跡を細かく観察しますと、木を割った時にできる割り肌という痕跡がこの中では見られますので、これは木を割って、その後、仕上げをしたということがわかります。仕上げは、文字が書いてある表面ですね、これは台鉋と呼ばれる、現在も通常使われている鉋です。ところが裏面は、痕跡を見ますと、槍鉋と呼ばれる古代以来の、台鉋が出現する前に使われていた鉋ですね、この跡が残っておりまして、これが観察できるというものでございます。

この祈祷札ですが、上の方と下の方に2カ所の釘の穴が認められまして、元々はどこか柱のような場所に打ち付けられていたということがわかります。この打ち付けられていた場所等についても、後ほど報告が予定されているところでございます。

次に、同じく資料2頁の⑵「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札です。前の写真の向かって左側、高さの高い方がこの祈祷札に相当いたします。これは、高さが81センチ、それから上の幅が13.5センチ、下の幅も13.5センチ、厚さは0.5から0.65センチということで、⑴の祈祷札に比べると、やや高さは高いのですが、幅がやや狭い、そして厚さが薄いというような形状になっています。これも木でできておりまして材質は杉材です。

2枚の祈祷札の材質につきましては、樹種の科学的な分析を行いまして、杉材と特定をすることができたものでございます。

この2枚目の高さの高い「大般若経」の祈祷札につきましては、その痕跡から見ると表面、裏面どちらとも台鉋による加工と判断できます。これも、釘の穴が上の方、それと下の方の2カ所に見られますので、こちらも、先ほどの「如意珠経」祈祷札と同様に、元々はどこかに打ち付けられていたということがわかります。

さて、この祈祷札の2枚とも、墨書といいまして墨で書かれた文字が確認できます。城戸先生もご指摘されていたように、向かって右側の「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札につきましては、現在でも肉眼で判読することができますが、もう一つの高さの高い「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札につきましては、上の方はかすかに見ることができますが、その他は肉眼ではほとんど見ることができませんでした。しかし、赤外線撮影による調査を行って、ほぼ全ての文字を解読することが可能となりました。

資料3頁に、それらの文字を解読したものをつけております。2枚の祈祷札共に、中央に仏を表す梵字が記されており、その梵字の周りに、何かはねたような印があります。これは四封という呼び方をしているのですが、仏を守る四天王を表すと言われています。

梵字の下にひときわ大きく文字が書かれておりまして、これがいわゆる祈祷札の願文、願いの文でございます。願文の右側の方には、2枚の祈祷札ともに慶長16年という銘文が記されております。慶長16年にこの祈祷が行われたことが、これによって明らかになります。そして、左側には、正月吉祥日と書かれていて、この祈祷が正月に行われていたということが判断できます。

この「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札につきましては、右側の文字、慶長16年という文字の下に大山寺という文字がありますので、大山寺が関わって祈祷が行われていたということがわかるというものでございます。

以上が、長い間所在がわからなかったこの祈祷札の発見の経緯でございます。それから、この度の発見によって、城戸先生が確認されていた以上の多くの情報が、いろいろな調査の結果として確認できたということをご報告申し上げました。

最後に、資料３頁の方に「おわりに」として、わかったことをまとめております。

１つは、この祈祷札の発見によって慶長16年に祈祷が行われたということが明らかになっていますが、これが松江城天守に掲げられていたことで、これまで松江城の創建に関わる明確な一次的な資料がなかった中で、松江城天守の創建年代を慶長16年正月以前とみなすことができる第一級の資料の発見となったということです。松江城天守そのものが慶長16年の正月以前に創建されたとみなすことが可能となってくることが大変大きな成果だと思います。

それから、「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札は、赤外線撮影によって、この度初めてそこに書かれた文字の大半がわかったわけですが、この文字の解読によりまして、この慶長16年正月吉祥日の祈祷には天台宗大山寺がかかわっていたということが明らかになりました。これは全く新しい事実でございました。

一方で、松江城を築城いたしました堀尾氏は、高野山奥の院に一族の墓所を設けます。また、松江城の鬼門に当たる場所、これは松江城天守の北東方向に当たりますが、こちらには真言宗千手院を置き、裏鬼門ということで、これは天守の南西側に相当するところでございますが、こちらの方には真言宗報恩寺を配置するということで、堀尾一族、堀尾吉晴が、松江城創建に当たって、真言宗と深い関係を持っていたということは大変興味深いところでございます。

今回の祈祷札は、そういう意味では全く新しい情報を私達に与えてくれました。お城には、いろいろな技術が駆使されておりますが、一方で、宗教的な背景をもって祈祷が行われていたということは間違いありませんので、この祈祷札を通して松江城、あるいは松江という場所についての、宗教的な背景というものを多様な面から明らかにしていくことが可能になったのではないかと考えております。

以上、簡単ではございますが、松江城天守創建に関わる祈祷札について、これまで概要としてわかったことをご報告申し上げます。どうもありがとうございました。

資　料　※「松江城研究第２号」から転載

再発見の祈祷札

松江城天守創建に関わる祈祷札について

稲田　信　内田　文恵　居石　由樹子

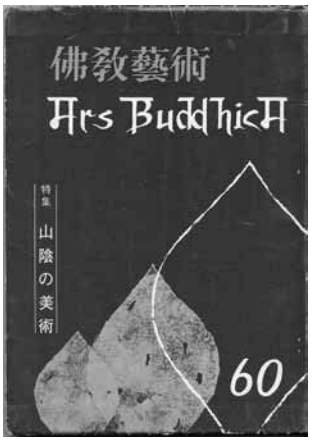
はじめに

本稿は、松江市史編纂事業の基礎調査として行っている松江市内寺社史料調査の一環として、松江神社所蔵の棟札類を調査した際（2012年５月21日）、松江城創建に関わる祈祷札２枚を確認したので、その概要について報告するものである。

この２枚の祈祷札は、城戸久氏が1966年（昭和41）４月30日発行の「松江城天守」『仏教芸術』において、1937年（昭和12）７月に氏が松江城天守を実測調査した際に４階に所在したと敢えて記したものである（城戸久「松江城天守」『仏教芸術』60：以下、「城戸論文」）(注１)。

1955～60（昭和25～30）にかけて松江城天守は解体修理され、『重要文化財松江城天守修理工事報告書』(注２)が刊行されたが、「城戸論文」も指摘するように、この報告書にはこの２枚の祈祷札に関する記述はなく、また、松江歴史館が所蔵する解体修理時の諸記録（長らく松江城本丸の再建櫓内に収蔵されていた）にも祈祷札に関する資料は残されていない。松江城天守創建に関わる重要な資料にも関わらず、1937年に城戸氏が確認して以後、その所在をたどることが出来なかったのである。

なお、和田嘉宥氏の研究により、松江城創建に関わる祈祷札の存在については、「右明和三年（1766）丙戌卯月初旬写之者也　御破損方」の奥書のある『御城内惣間数』(注３)（国文研究資料館所蔵）に、上記奥書に続いて「御天守四重目並塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥ト有之関原御陣ヨリ十三年目御成就御祈祷と見ル」と記す貼紙があることからも確認されている。



『仏教芸術』60表紙

天守の創建については、出雲私史に「十六年（慶長）内城及天主閣成。地曰亀田山城。曰干鳥城。皆依旧地名也。」とあるなどによって、慶長十六年(一六一一)完成と認められている。ただ筆者は、昭和十二年七月、この天守を実測調査した際に、左のような祈祷札が四階に所在したことを見出している。二枚あって、当時一枚は読了出来たが、他はかすかに慶長十六の記年が判読されるばかりであった。長三尺、幅四寸七分、厚二寸七分の檜板の表に

慶長十六　暦　　欽
梵字　奉読誦如意珠経長栄処
正月吉詳日　　言

とあり、裏面には文字はない。（第２図）

この祈祷札は恐らく古記に照らして、天守完成の時と認められ、それが慶長十六年（一六一一）正月であったことを確認させるまことに重要な資料である。（昭和三十年発行の重要文化財松江城天守修理工事報告書にこの祈祷札の存在が掲げられていないのは、不審であって、その後紛失したものか、どうか。よって敢えて、ここに紹介したわけである。）

城戸久「松江城天守」『仏教芸術』60抜粋
（この抜粋部分には「第２図　松江城天守祈祷札（昭和修理前）」とある２枚の祈祷札の写真が添えられている。原文は縦組）

１．祈祷札の現況について

２枚の祈祷札については、一部虫損が認められたが、いずれも保存状態はよく、「城戸論文」掲載の写真（「松江城天守祈祷札（昭和修理前）」:『仏教芸術』60　P134）と比較しても形状の変化は認められない。また、墨書の肉眼による判読具合も城戸氏が1937年に判読出来た内容とほぼ同様であり、表面の劣化が進んでいるとは認めがたい。幸いにもこの75

年の間、保存環境のよい状態で保管されていたことが分かる。

祈祷札に記された墨書については、島根県古代出雲歴史博物館の協力で行った赤外線調査により、1937年（昭和12）時点で判読がほとんど出来なかった１枚についても（「城戸論文」）、その大半が判読できた。２枚の祈祷札は表面中央に記された願文によって識別することとする（注４）。

（１）「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札

法量は、願文の記された面を正面とし、総高70.6㎝、肩高（右）69.9㎝、肩高（左）69.7㎝、上幅14.2㎝、下幅14.2㎝、厚さ0.7～0.85㎝である。

形状は、長方形の板の上部の角を切り落として山形（三角形）にする尖頭型の祈祷札である。尖頭はわずかに左に寄る左右非対称で、上部の幅と下部の幅は同じである。底辺の２隅とも切り欠きは無い。左端中央と右端中央やや下に虫害等のためか欠損がわずかに認められる。

材質は杉材（注５）である。割り肌が認められることから割り板を削り、仕上げは表面が台鉋で、裏面は鑓鉋の痕跡が残ることから鑓鉋によるものと分かる。裏面には四周に取り掛けの痕が残る。

設置方法は、釘穴が上下２か所認められ、元はどこかに打ち付けられていたことが分かる。「城戸論文」によれば、1937年に松江城４階に所在していた祈祷札の裏面も調査されていることから、すでに当時は取り外されており、置札のようになっていた可能性もある（「城戸論文」には「所在」の状況は記されていない）。上の釘穴は中央からやや左寄りで尖頭の下12.3㎝、下の釘穴は中央から少し右寄りで底辺から14.7㎝である。釘穴からは打ち付けた釘の形状は判然としない。表面の釘穴の上下には鉄釘の錆であろうか、黒色化した染みが認められる。

（２）「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札

法量は、願文の記された面を正面とし、総高81.0㎝、肩高（右）79.5㎝、肩高（左）79.7㎝、上幅13.5㎝、下幅13.5㎝、厚さ0.5～0.65㎝である。

形状は、長方形の板の上部の角を切り落として山形（三角形）にする尖頭型の祈祷札である。尖頭は左右対称で、上部の幅と下部の幅は同じである。底辺の２隅とも切り欠きは無い。左上端と左下端に虫害等のためか欠損が認められる。

材質は杉材で、割り板を用いる。仕上げは両面とも台鉋による。

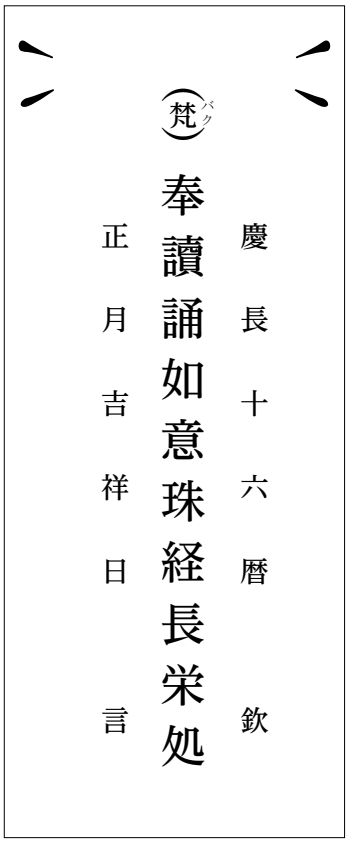
設置方法は、釘穴が上下２か所認められ、元はどこかに打ち付けられていたことが分かる。「城戸論文」によれば、1937年に松江城４階に所在し、裏面も調査されていることから、すでに当時は取り外されており、置札のようになっていた可能性もある。上の釘穴は中央からやや左寄りで尖頭の下11.6㎝、下の釘穴は中央から少し右寄りで底辺から13.1㎝である。釘穴からは釘の形状は判然としない。表面の釘穴の上下には鉄釘の錆であろうか、黒色化した染みが認められる。また、裏面には上釘を軸に回転させたような痕跡があり、小さな紙片の付着（注６）も数か所認められた。

２．祈祷札の墨書

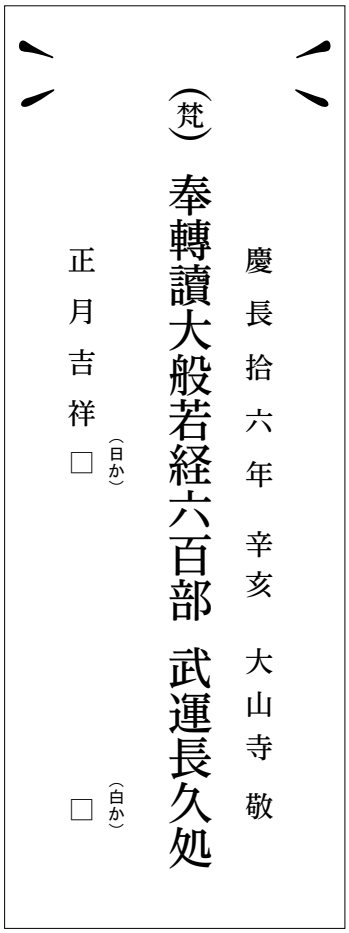
２枚の祈祷札は、いずれも表面の中央上端に梵字、その下に願文を大きく墨書し、右側に年（慶長十六歴）、左側に月日（正月吉祥日）を墨書する。また、左右上端には梵字を囲むように四天王を表すと考えられる四封「＞＜」を墨書する。裏面には墨書は認められない。先に記したように、「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札は城戸氏も「城戸論文」で指摘するように全ての墨書を肉眼で判読できた。一方、「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札は、肉眼では判読がほとんど出来なかったが赤外線調査によってほぼ全ての文字が判読できた。

なお、「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札の梵字は「バク（釈迦如来）」を表す。「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札の梵字は「チ（ヂ）クマン(般若心経)」或いは「キリーク（如意輪観音、阿弥陀如来)」を表す。翻刻文は次の通りである(注7)。

（1）「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札
（表）



（2）「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札
（表）



おわりに

城戸久氏が「城戸論文」で紹介した２枚の祈祷札が確認できたことで、松江城天守創建に関わる重要な情報をあらためて多様な角度から検証できるようになったことは幸いである。城戸氏は「城戸論文」で、「この祈祷札は恐らく古記に照らして、天守完成の時と認められ、それが慶長十六年（一六一一）正月であったことを確認させるまことに重要な資料」と指摘している。様々な祈祷の要因が想定出来る中で、慶長16年正月に祈祷が行われたこと、その時の祈祷札が松江城天守に所在していたことで、これまで明確な史料のなかった松江城天守の創建年代を慶長16年正月以前と看做すことも可能となった。

「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札の赤外線撮影、墨書翻刻により、慶長16年正月吉日の祈祷には天台宗大山寺が関わっていたことも明らかになった。一方で、松江城を築城した堀尾氏は高野山奥の院（和歌山県）に一族の墓所を設け、松江城の鬼門（北東）には真言宗千手院（松江市石橋町）、裏鬼門（南西）には真言宗報恩寺（松江市玉湯町）を配置するなど、真言宗との関係も極めて深い(注8)。祈祷札や関連史料を通して、松江城築城時の加持祈祷や宗教的背景、その後の松江城に関わる宗教的行為の系譜も見えてくる可能性がある。今後の多様な調査が求められる所以である。

（注１）城戸久「松江城天守」『仏教芸術』60　―特集　山陰の美術―　毎日新聞社　1966

（注２）重要文化財松江城天守修理事務所編『重要文化財松江城天守修理工事報告書』1955

（注３）和田嘉宥氏から、『御城内惣間数』（大学協同利用機関法人　人間文化研究機構　国文学研究資料館蔵）巻末の貼紙にある「御天守四重目並塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥ト有之関原御陣ヨリ十三年目御成就御祈祷と見ル」との記述は松江城創建に関わる祈祷札に関する記事であるとのご指摘をかねてよりいただいており、「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札の墨書翻刻により、この卓見を再確認することができた。『御城内惣間数』は奥書に「明和三年丙戌卯月初旬写之者也　御破損方」とあり、明和３年（1766）に書写されたことが分かる。『御城内惣間数』については、和田嘉宥『御城内惣間数』（本書掲載）に詳述。

（注４）国立歴史民俗博物館『「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書　社寺の国宝・重文建造物等　棟札銘文集成』―中国・四国・九州編－1993　等を調査の参考とした。

（注５）樹種同定調査による。「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札も同様。分析結果については、渡邉正巳「松江城祈祷札の樹種同定及びウイグルマッチングによる年代測定」（本書掲載）に詳述。

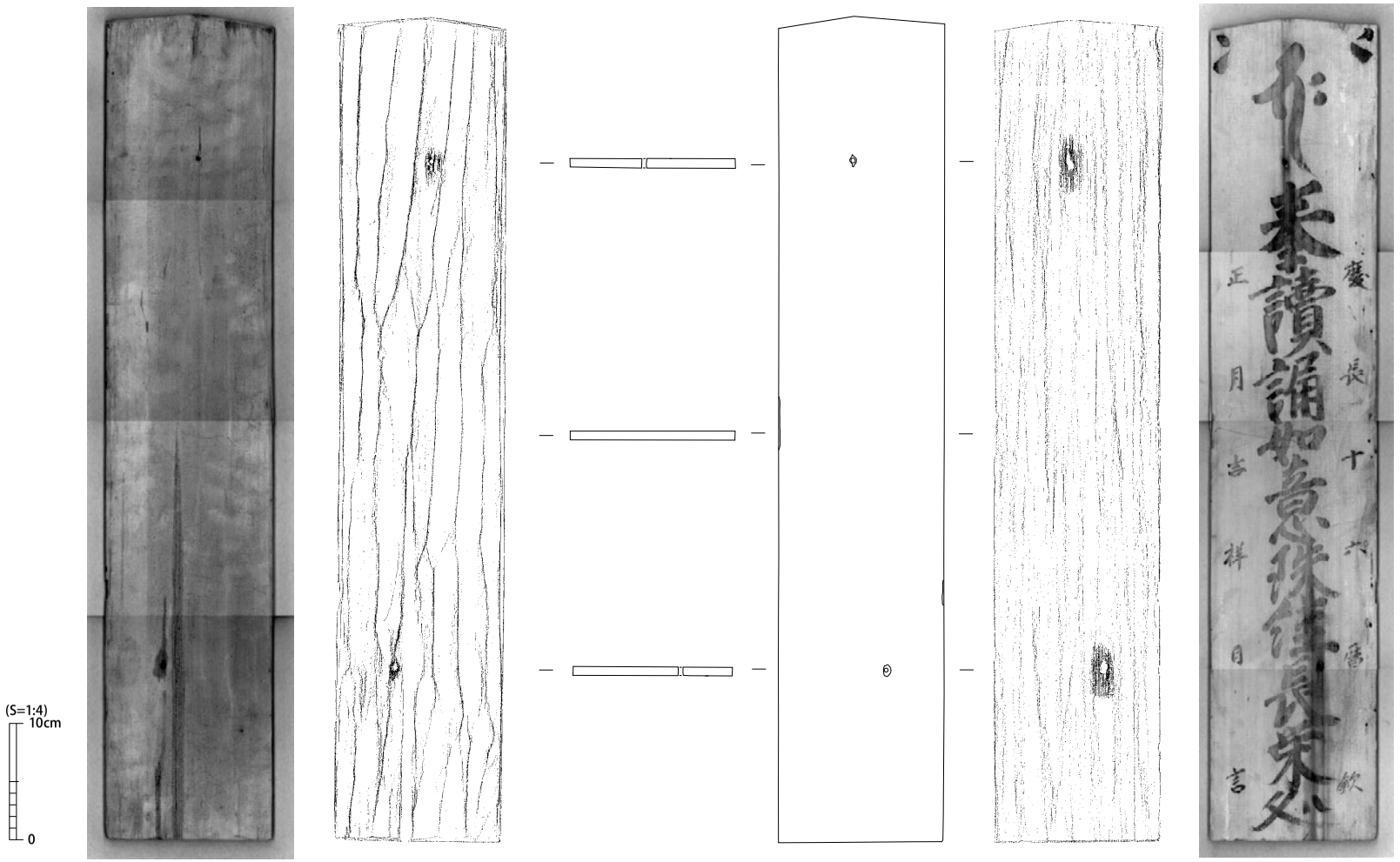
（注６）付着した紙片の分析結果については、安部己図枝「「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札付着の紙片について」（本書掲載）に詳述。

（注７）如意珠経については、高野山大学密教文化研究所西原司朗氏から「如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪呪王経」の略、との説明を受けた。

（注８）西尾克己、稲田信、木下誠「高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について」『松江歴史館研究紀要』第３号　松江歴史館　2013、高野山奥の院には堀尾一族の墓所として、関係する13基の五輪塔、宝篋印塔が現存し、堀尾吉晴、忠氏、忠晴、忠晴娘の石塔などが並ぶ。「奥院絵図」（宝永４年）、「高野山奥院総絵図」（寛政５年）などにも墓所が描かれている。高野山での堀尾氏の宿坊は龍生院（後に大円院に引き継がれる）で、紀州藩が編纂した『紀伊續風土記』「高野山の部」（天保10年）の龍生院の項には、「（前略）堀尾吉晴主此天の霊異を仰信ありて宮殿を修し正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す 且堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」とある。堀尾吉晴は高野山での武運栄久などの誓祈を乞うており、松江城創建時の祈祷が高野山でも行われた可能性は高い。

［本稿は、松江市史編纂事業の基礎調査として行っている松江市内寺社史料調査の一環として、2012年（平成24）５月21日に松江神社で実施した木札調査の成果を基とするもので、調査には稲田信、内田文恵、居石由樹子があたり、本稿の執筆、祈祷札の墨書翻刻、実測、採拓も分担して行った。赤外線撮影は同年５月25日に卜部吉博国宝化推進室長とともに島根県古代出雲歴史博物館の協力を得て行った。墨書翻刻などでは史料編纂室職員・松江歴史館学芸員、写真撮影では伊藤孝一氏、図面の浄書では仁島ゆかり氏の協力を得た。祈祷札は殺虫処理（脱酸素材を用いた殺虫法）を行い、現在松江歴史館で保管されている。］

「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札

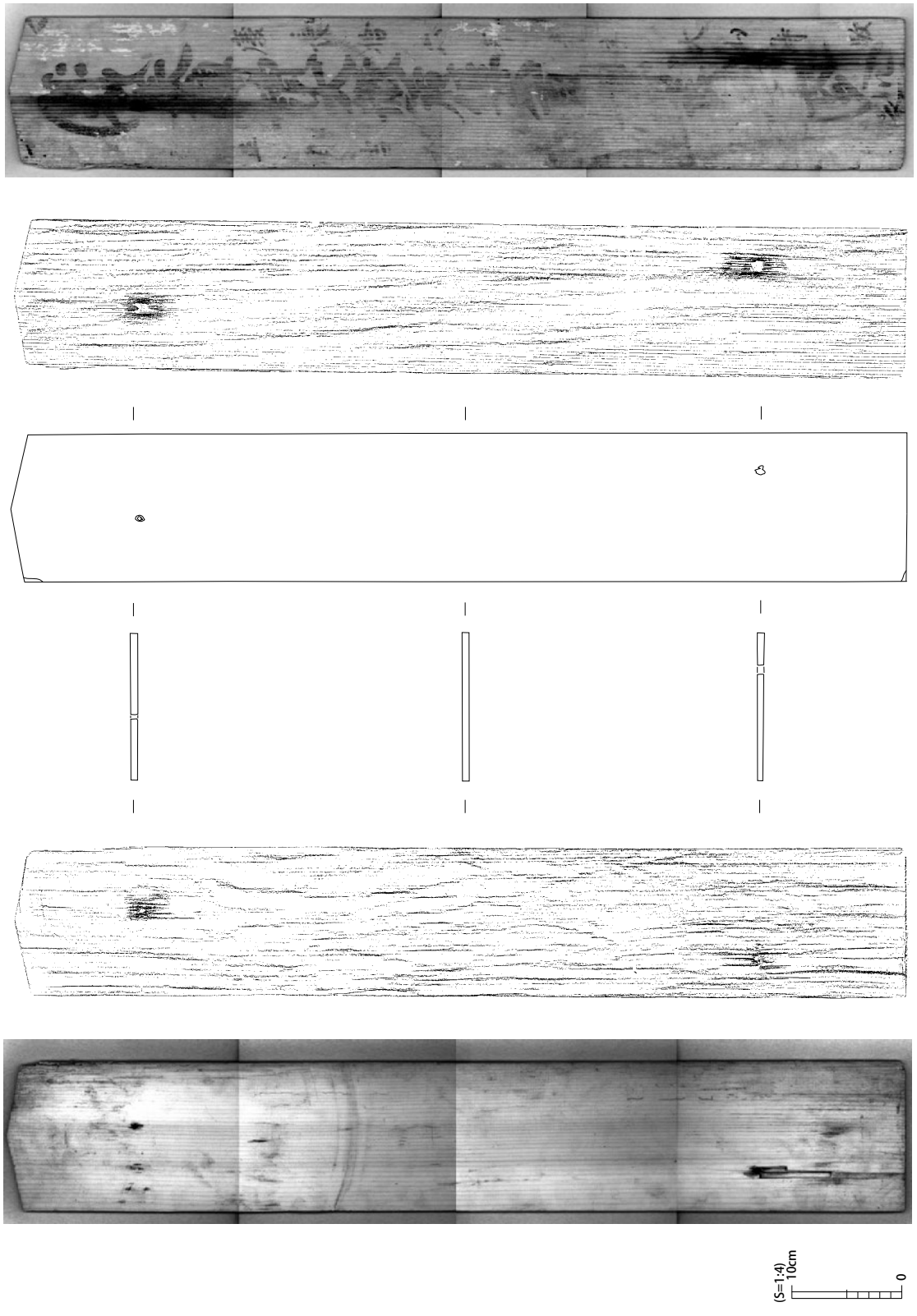


赤外線写真（裏）　拓本（裏）　実測図（断面）　実測図（表）　拓本（表）　赤外線写真（表）

慶長十六暦欽
(梵)奉讀誦如意珠経長栄処
正月吉祥日言

翻刻文

「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札



報告２　「文献資料上の祈祷札について」

米子工業高等専門学校名誉教授　和　田　嘉　宥

私は、建築史に携わっていますけれども、松江市の文化財保護審議会や松江城調査研究委員会、また市史編纂では松江城部会にも関わっておりまして、そういった関連の中で研究している史料を紹介するという形で話をさせていただきます。

先ほど稲田室長から、祈祷札についての詳しい話がありましたけれども、それに加えて祈祷札とは別の木札についてと、それから祈祷札の持つ意味といったことについて、他の史料とともに紹介させていただきたいと思います。

お手元にお配りした資料、それからスライドを用意しましたので、それをもとに話をさせていただきます。

まず、お手元の資料の『御城内惣間数』についてです。これは、松江城の本丸、二の丸を中心に、松江城のいろいろな施設について記されたもので、江戸時代の中期、奥書の方では明和３年となっていますけども、ほぼ江戸中期から後期にかけての松江城の状態を記したものです。

これに似た史料として『(竹内右兵衛書きつけ)』がありますが、それとともに見ますと少し松江城の変遷もわかってくるということで、今回、『松江城研究第２号』(平成25年３月25日、松江市教育委員会発行）でも報告していますので、機会があればご覧いただければと思います。

この『御城内惣間数』には松江城天守について触れてあるわけですが、まず見開きの部分に、松江城天守はどういうものか、各重の柱の本数とか太さといったものが記されています。ただ、この最後のところに「御天守ふな形」と記されていて、どうもこれは、天守のひな形、つまり模型のことを書いているのかもしれません。こういったことが貼紙として記されていますが、これが具体的に、いつ貼られたのかはわかりません。これをどういうふうに理解するかというのは検討を要するかと思います。そして次の頁には天守の規模が記されていますが、今の天守の規模とほとんど変わらないようであります。当時の天守はこういった形であったということがわかってくるわけです。

それから、最後の奥書の部分に「御破損方が明和３年にこれを写す」という内容が記されています。この御破損方ですが、作事奉行が支配する御作事所という役所がありますがそこに属しています。御破損方といいますから恐らく修理関係を主にやっていた部署だろうと考えられますが、元々は城郭などの建物を中心に、修理にあたっていたのは御作事所でありまして、そこでは御大工が中心に働いていたものです。そういう中で記されたもので、「明和３年にこれを写す」とありますから、明和３年には、この文書が完全にでき上がっていたものと思われます。ですが、中身はそれ以前の建物についてもいろいろと記されています。こういったことから、この史料は結構古いものですが、中には貼紙で元治元年に書き加えられたところもありますので、幕末まで使い続けられていたこともわかるわけです。

今回、発見された祈祷札について具体的に伝えるものとして、その奥書のところにも貼紙がありまして、そこに「御天守四重目并塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥と有之」と記されています。これで城戸先生が発見されたという祈祷札と似た内容の祈祷札が、この時代に存在していたということになります。ただ、城戸先生は、２枚の祈祷札を４階で確認したと記されていますが、ここでは「四重目并塩蔵ニ」となっています。これがどういう意味を持つかということは、なお検討を要すると思っておりますが、いずれにしても「大般若札」と記されていますので、今回確認された「大般若経」の祈祷札とほぼ通じるところがあるということです。そして、続いて「関原御陣ヨリ十三年目」、これは多分「十二年」の間違いかと思いますけども、関ヶ原合戦より13年目にお城が完成した、お城が成就したそのときの祈祷であると見ているわけです。そして「天明七未年迄」とありますから、天明７年にこれを『御城内惣間数』に貼り付けた可能性があります。それで「百七拾七年ニ成ル」と記されておりますから、その当時、松江城天守の「四重目并塩蔵」に祈祷札があったということが確認できる、そのような意味を持つものだということをご理解いただければと思います。

以上が祈祷札についてですが、先ほど稲田室長から説明がありましたけれども、赤外線撮影で書かれている文字がかなりはっきりとわかってきたということで、「如意珠経」だけでなくて「大般若経」の祈祷札の存在も確認できたわけです。それで、この「大般若経」祈祷札の方ですが、「大山寺」という文字が記されています。大山寺にはこの当時、豪円という僧侶がおりまして、大山寺を再興したということで良く知られています。非常に活躍した僧侶で、豪円山という名前でも現在に残されておりますが、ただ、いろいろと大山寺の史料を調べますけれども、大山寺で豪円が松江城に関わりを持ったということを伝えるはっきりした史料は、地元の米子でも見つからないというのが実情です。恐らく、豪円の働きが強くあって、たまたま豪円は、米子城主である中村家と折り合いが悪かったということもありますから、そういったことも影響していたかもしれませんが、松江城に関わりを持つところがあったのかもしれません。これは推定でしかありませんけれども、そういったことが言えるかもしれないということです。

実は、先ほど昭和の修理工事報告書の話がありましたけども、この修理工事報告書には祈祷札のことは一切書かれてなく、それとは別の木札というものについて記されております。それが、一重目、二重目、三重目で４枚見つかって、これが松江城の築城や修理の際の祈祷の木札としてまとめられていますので、それを紹介させていただきます。スライド⑨をご覧いただきますと、実物はこういうもので、普段は松江城の天守の中に保存展示されております。これらに関しては松江城天守修理部が記した『解体修理により発見された祈祷の木札について』で、詳細に報告がされています。

それで、そのうち「一重中央」のものには、「中央に祭られた不動明王の手にする杖と鎖とをもって悪魔を払らひ災厄を除去破壊する祈願の文意で真言地鎮鎮宅の願文である」との解説があります。ですからお城をつくるとき、つくり上げつつあるときの願文としてつくられた木札であるということで、多分築城当時のものじゃないかということが言われております。こうした木札が３枚同じようなものがあります。そしてもう１枚「三重目きた」というのがはっきりとはわからないのですが、これは修理の時の願文ではないかと言われていて、これはもう少し検討を要するのかもしれません。このような建築の際の鎮宅というのでしょうか、そういう一連のものがあって、更に竣工の際には、祈祷札がつくられたということで、もしかしたらこれらはセットで考えた方がいいのかなというこ

とで紹介させていただきました。この時代には、棟札よりは木札、あるいは祈祷札の方を重視していたということがあったのかもしれません。

このような木札の事例ですが、こうしたものは城だけではなくて、普通の住宅などにも同じような例を確認することができます。スライド⑰ですが、これは私が住んでいる米子の近く、大山町の所子にある古いお宅のものです。そこに、これは２枚しか確認していませんでしたけれども、この家の人のお話では、本来は４カ所にあったということです。東西南北にこのような木札を上げて建物を守るということをしていた。同様に、松江城の場合も先ほどの木札とか祈祷札といったものを、建物のそれぞれの場所に上げて守る。そういう狙いがあったのかなと考えます。そういった点では、木札とそれから祈祷札というのは、やはり１つのセットだというふうに考えることもできると思っています。

それで、棟札は建物の建築年代を特定する史料になるわけですが、それ以外の例えば祈祷札が、建築学的にどのような意味を持つかについてです。例えば重要文化財や国宝の社寺建築において、基礎資料となる棟札等をまとめたものが、スライド⑲国立歴史民俗博物館の『棟札銘文集成』ですけれども、その中には棟札以外に祈祷札も、やはり棟札と同様の意図を持ってつくられたものだということが明記されています。『棟札銘文集成』に載っている祈祷札は極めて少ないですけれど、来迎寺とか、その他にも幾つかの社寺にありまして、そういう所にも祈祷札があったことが報告されていますので、紹介してみたいと思います。

この『棟札銘文集成』は国立歴史民俗博物館がまとめたものですが、調査の対象は、社寺建築でも国宝とか重文の社寺建築に限っています。実はこの「非文献資料の基礎的研究」というのは、初期の段階では、社寺以外の民家や城郭についても継続される予定だったんですけれども、一応、今回は社寺建築だけの調査で終わっています。その中では棟札だけでなく、銘札とかあるいは祈祷札であっても棟札と同じ意味を持つということで、同様に扱われています。祈祷札もやはり建築の創建を伝えるものとして大変な価値があるということが記されているわけです。それで具体的に見てみますと、来迎寺のものには「享保十三云々」とあって、真ん中に願文が「奉修行不動護摩供一座寺門鎮静堂内安全祈處」と書かれていて、建築年代を伝える史料になっています。こういった祈祷札が幾つかあったわけです。それから、大峰山寺本堂ですが、これは実は本堂ではなくて役行者堂かも知れないということですが、元禄４年の建立祈祷札です。これには、「奉讀誦妙法蓮華経十五部造営成就」と記されていて、松江城のものと結構似通った願文になっています。そういった点で、今回発見された松江城の祈祷札というのも、ほぼこの大峰山寺のものと同じような意味を持つものかなというふうに考えています。これは、報告書で活字になったものしか見ていなくて、実際の写真もありませんから、可能であれば具体的に実物を調べてみようかと思っています。こういった祈祷札が、建築年代を伝えるものとして報告されていますので紹介させていただきました。

さて次に、他にも松江城に関して、天守についての記載がある史料が幾つかありますので、それを紹介させていただきます。

城下町の絵図及び城郭図ですが、スライド㉕のように堀尾期、京極期、それから正保期、享保期と４点ありますけれども、そのうち天守が描かれているのは正保期の「出雲国松江城下絵図」（以降「正保絵図」と称する。）と享保期の「御城内絵図面」です。また、天守を描いた史料としては、

スライド㉖にある『(竹内右兵衛書きつけ)』とか『御本丸二之御丸三ノ丸共三枚之内』というようなもの、それから松江歴史館所蔵の『松江城縄張図』がありますが、この『御本丸二之御丸三ノ丸共三枚之内』と『松江城縄張図』の二つは基本的には同じ種類のものと考えることができます。更に『(竹内右兵衛書きつけ)』を含めたこの三つの史料には非常に大きな共通点があります。それは、この後に祈祷札の打付け位置についての報告がありますが、祈祷札が打ち付けてあったと確認された地階の柱が、他の柱と比べ2本とも非常に太く描かれているということです。きちんと、どの図面にも太く描かれている。だから、やはり地階の祈祷札が打ち付けてあった太い柱というのは、建築当時から非常に重要な意味をもっていたということが、これらの史料からもわかってくると思います。

それから、先ほどの絵図ですが、堀尾期と京極期のものには天守の姿は描かれていませんけれども、正保期の「正保絵図」と、それから享保期の「御城内絵図面」には天守の姿が描かれています。「正保絵図」というのは幕府に提出するために描いたもので、少し誇張されているのか、あまり正確ではありません。それに対して「御城内絵図面」というのは、比較的正確な姿をあらわしているものであります。この「御城内絵図面」については、いろいろと検討していますが、松江城の本丸、二の丸、三の丸の建物が、その当時どういう所に、どういう姿をして建っていたかということが具体的に描かれています。大きさも含めてかなり正確に描かれていることがわかります。

それで、スライド㉘の松江城天守の姿ですが、左の方が「御城内絵図面」に描かれている天守ですけれども、右の現在の天守の姿と比較しますと、二層の上に櫓を乗せているというところも同じです。それから二層目の棟の屋根の上には華頭窓も描いてありますので、ほぼ正確な姿をあらわしています。ただ、現在の天守は上層の方は壁の上部が漆喰になっていまして、全部が黒い板の壁ではなく漆喰壁の部分もありますが、下層の壁は全体が黒い板で覆われています。しかし、この「御城内絵図面」を見ますと、一層、二層目、三層目、四層目すべて腰までは板張りで、腰部から上は漆喰になっている。ですから、そういった違いについては、どういうことなのか調べてみないといけませんけども、基本的には享保期の天守の姿というのは今と変わらないものであるということがわかります。そういったことを理解していただければと思います。

以上、ご紹介して私の報告を終わらせていただきます。

文献資料上の祈祷札について

和田　嘉宥

『御城内惣間数』

（表紙見開）

御天守柱数三百九拾四本
内
御玄関　柱数　　廿本　太サ　尺
下段　柱数　六十六本　太サ　尺弐寸五分
壱重目　八拾七本　同
二重目　八拾七本　同
三重め　八拾本　同　七十九本
四重め　四拾壱本　同
五重め　三拾三本　大（太）サ　尺
〆
御天守ふな形（ひ）二十五分一

（貼紙）

一　御天守高九丈四尺弐寸　但　間六尺五寸ニシテ拾四間三尺弐寸

内
一重目　東西拾弐間　但　高壱丈壱尺三寸
南北拾間
二重目　四方右同断　但　高壱丈壱尺五寸
畳敷右同断
三重目　東西拾間　但　高壱丈壱尺六寸
南北八間　百六拾畳敷
四重目　東西八間　但　高壱丈五尺三寸
南北六間　九拾六畳敷
中段　東西壱間半　但　高サ　四重めより七尺弐寸
南北弐間　六畳敷　中段より上迄七尺七寸
但板上ハより上ハ迄
五重目　東西五間　但　高壱丈五寸
南北四間　四拾畳敷

天守の関する記述

（奥書）

右者明和三丙戌卯月初旬写之者也
御破損方

（貼紙）

御天守四重目并塩蔵ニ大
般若札ニ慶長十六年辛亥と有之
関原御陣ヨリ十三年（十二カ）目御城成就
御祈祷と見ル天明七未年迄凡
百七拾七年ニ成ル

今回発見された祈祷札

『重要文化財松江城天守修理報告』に記録されている木札

一、一階中央　（表）梵字　板長さ五・九五寸　巾三・五寸
（記載内容）真言宗による不動修法の地鎮祈願文

二、二階東　（表）梵字　（裏）二重東　ほぼ同じ寸法
（記載内容）右に同じ

三、二階中央南柱　（表）梵字　ほぼ同じ寸法
（記載内容）右に同じ

四、三階　（表）梵字　（裏）三階北　ほぼ同じ寸法
（記載内容）真言宗による修理の時に祈願文

『社寺の国宝・重文建造物等　棟札銘文集成』に見る祈祷札

・来迎寺（松坂市白粉町）本堂享保十三年祈祷札
・明王院（大津市）本堂正徳五年祈祷札
・白玉手祭来酒解神社（大山崎）神輿庫寛永十一年銘札
・大峰山寺本堂役行者堂力元禄四年建立祈祷札

資料を通して見える十八世紀頃の松江城天守

・『（竹内右兵衛書つけ）』（一六七〇年代作成か）
・『御本丸二之御丸三枚之内』（一六七〇年代作成か）
・『松江城縄張図』（一七世紀末作成か））
・『御城内惣絵図面』（一七二〇年頃作成か）（左図は天守廻り）

①

文献資料上の祈祷札について

和田　嘉宥

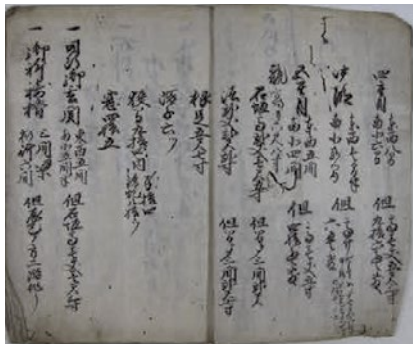
②

『御城内惣間数』

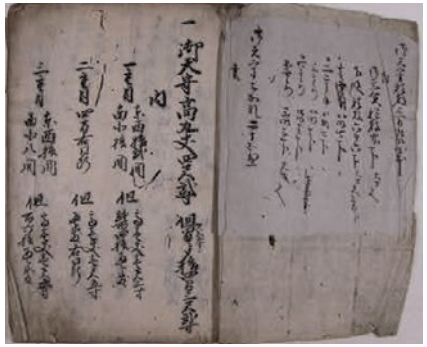
国文学研究資料館所蔵

③

天守に関する記述



2枚目



見開き

④

見開き貼紙

御天守柱数三百九拾四本

内

御玄関　柱数　廿本　太サ　尺

下段　柱数　六十六本　太サ　尺弐寸五分

壱重目　八拾七本　同

二重目　八拾七本　同

三重め　八拾本　同　七十九本

四重め　四拾壱本　同

五重め　三拾三本　大(太)サ　尺

〆(ひ)

御天守ふな形二十五分一

中中

⑤

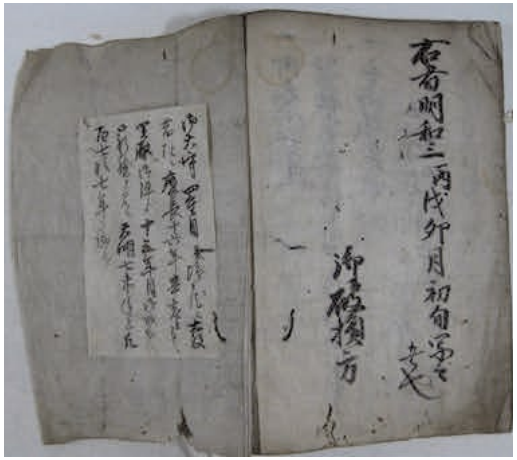
一　御天守高九丈四尺弐寸
　　但　間ニシテ拾四間三尺弐寸

天守の規模

一重目　東西拾弐間　高壱丈壱尺三寸
　南北拾間　但　弐百四拾畳敷
二重目　四方右同断　但　高壱丈壱尺五寸
　畳敷右同断
三重目　東西拾間　高壱丈壱尺六寸
　南北八間　但　百六拾畳敷
四重目　東西八間　高壱丈五尺三寸
　南北六間　但　九拾六畳敷
中段　東西壱間半　高サ　四重めより七尺弐寸
　南北弐間　但　中段より上迄七尺七寸
　六畳敷　但板上ハより上ハ迄
五重目　東西五間　高壱丈五寸
　南北四間　但　四拾畳敷
鯱高サ　六尺八寸

⑥

『御城内惣間数』奥書・貼紙



⑦

（奥書）

右者明和三丙戌卯月初旬写之者也

御破損方

（貼紙）

御天守四重目并塩蔵二大
般若札ニ慶長十六年辛亥と有之（十二カ）
関原御陣ヨリ十三年目御城成就
御祈祷と見ル天明七未年迄凡
百七拾七年ニ成ル

⑧

慶長十六暦欽

（梵字）奉讀誦如意珠経長栄処

正月吉祥日言

慶長拾六年辛亥大山寺敬

（梵字）奉轉讀大般若経六百部武運長久処

正月吉祥

⑨

解体修理に伴い発見された祈祷札

一重中央柱

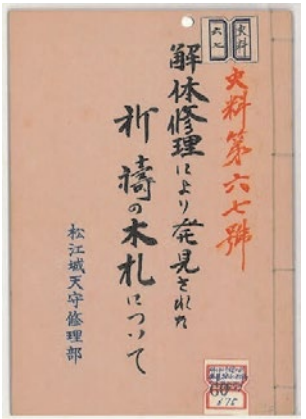
二重中央南

二重東

三重きた

⑩

『解体修理により発見された祈祷の木札について』

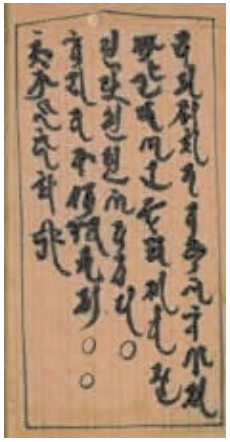


松江歴史館所蔵

⑪

一重中央柱の祈祷札

帰命ス諸々ノ金剛二暴悪大忿
怒ノ相アルモノヨ　守ルモノヨ
守ルモノヨ　一切ノ悪ヲナスモ
ノ達ヲ金剛ノ索ヲモツテ縛スル
モノヨ　金剛ヨ一切ノ障碍ヲ破
壊セヨ



⑫

一重中央

中央に祭られた不動明王の手に
する杖と鎖とをもつて悪魔を払ら
ひ災厄を除去破壊する祈願の文
意で**真言地鎮鎮宅の願文**である
からまぎれなく**築城当初において**
かかる修法によって行われた時の
ものに相違はない。

⑬

二重中央南の柱

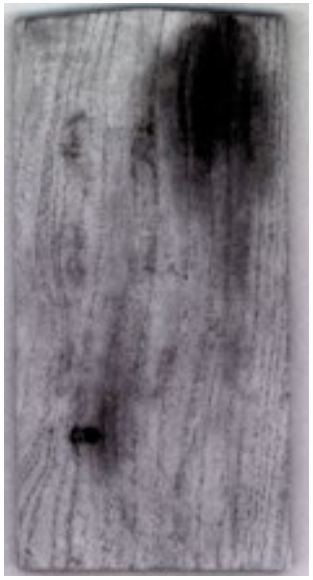
此の木札の梵字は悄々文字の鮮明を欠くけれども**右「一重中央」のものと同一の意味を書いたもの**である。
故に「二重中央南の柱」の祈願文も**築城当初において行われた修法のもの**である。

⑭

二重東

「一重中央」のものと文字の数や墨痕の状態から同一の文意によるものである。この木札の梵字は最も文字の鮮明を欠くけれども

⑮



三重目きた

前の三種とは異なって「八字文殊修法」によるものであって、文字の数も少ない即ち真言修法における佛を表わす代表文字が書かれたものである。これは「八字文殊修法」によるものであるから**新たに建てた時の修法のものでなくて、修理の場合における祈願のもの**である。
故に三重はこれによって構築当初の祈願文の木札でなく**修理の際の願文木札**がうちつけられていることを知る。

⑯

『修理報告書』に見る祈祷札の内容

一、一階中央
（表）梵字
板長さ五・九五寸　巾三・五寸
（記載内容）真言宗による不動修法の地鎮祈願文
二、二階東
（表）梵字　（裏）二重東
ほぼ同じ寸法
（記載内容）右に同じ
三、二階中央南柱　（表）梵字
ほぼ同じ寸法
（記載内容）右に同じ
四、三階　（表）梵字　（裏）三階北
ほぼ同じ寸法
（記載内容）真言宗による
修理の時に祈願文

⑰

民家普請に見る祈祷札

門脇家（江戸後期、大山町所子）

⑱

『棟札銘文集成』に見る祈祷札

来迎寺本堂

白玉手祭来酒解神社

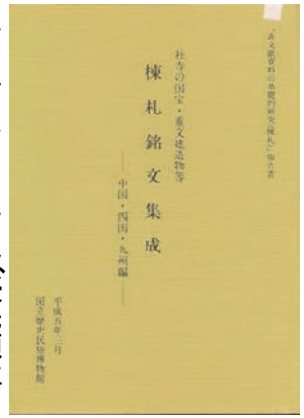
明王院本堂

大峰山寺本堂

⑲

「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書

社寺の国宝・重文建造物等
『棟札銘文集成』
国立歴史民俗博物館

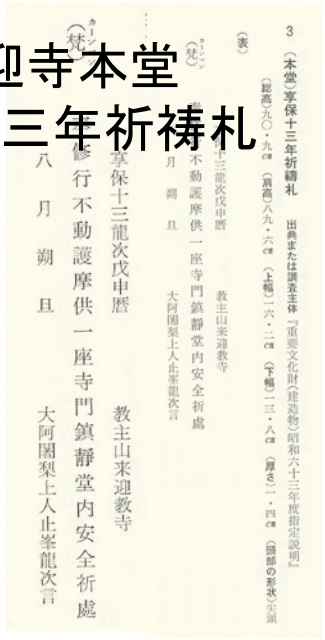


調査箇所　全国を対象、優先順位
①社寺のうち、国宝／重文建造物の棟札（調査済）
④社寺以外の民家や城郭などの棟札（未実施）

棟札のみならず、棟札銘・銘札・**祈祷札**であっても、棟札と同様の意図をもって制作された物を含む。

⑳

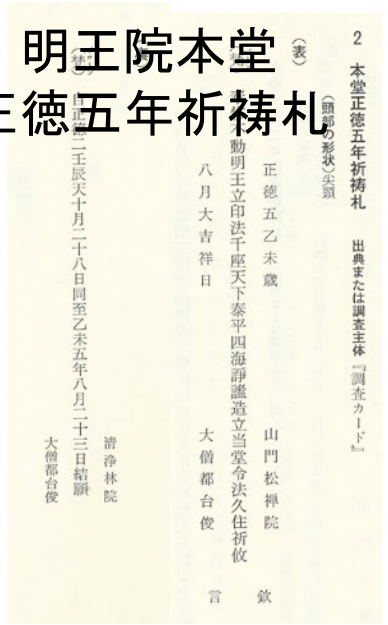
来迎寺本堂
享保十三年祈祷札



享保十三龍次戊申暦　教主山来迎教寺
奉修行不動護摩供一座寺門鎮静堂内安全祈處
八月朔日　大阿闍梨上人止峯龍次言

㉑

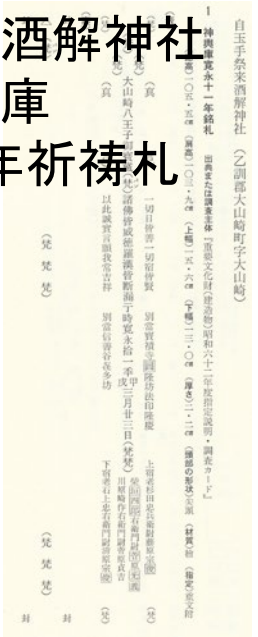
明王院本堂
正徳五年祈祷札



（表）
奉修不動明王立印法千座天下泰平
四海女海諍謐造立当堂令法久住祈攸
言　欽

㉒

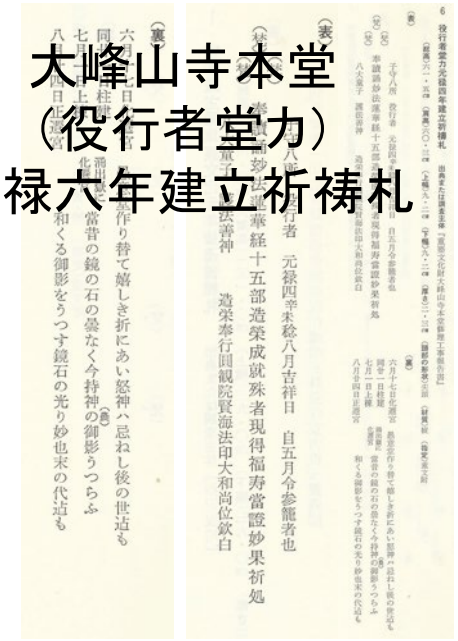
白玉手祭来酒解神社
神輿庫
寛永十一年祈祷札



（表）
大山崎八王子御寶蔵（梵）
諸佛皆威徳羅漢皆断漏
于時寛永拾一季申戌三月廿三日（梵梵）

㉓

大峰山寺本堂
（役行者堂カ）
元禄六年建立祈祷札



（表）
元禄四辛未稔八月吉日祥日
奉読誦妙法蓮華経十五部造營成就
殊者現得福寿當證妙果祈処

（裏）
六月十七日化遷宮
同廿一日柱建
七月一日上棟
八月廿四日正遷宮

㉔

天守について記載（描写）のある史料

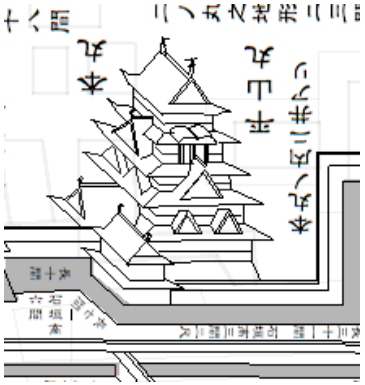
「堀尾期松江城下絵図」（慶長期）
「寛永年間松江城家敷町之図」（寛永16年以前）
「出雲国松江城下絵図」（正保期）
「御城内絵図面」（享保頃）

『（竹内右兵衛書つけ）』
「松江城縄張図」
「御本丸二之御丸三ノ丸三枚之内」

『御城内惣間数』（明和3年）

㉗

絵図史料に見る天守の姿



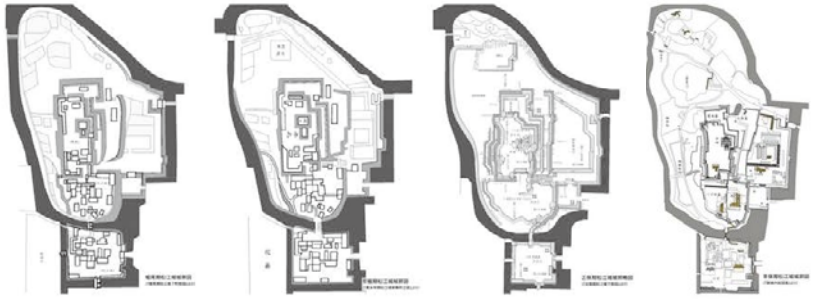
「正保絵図」

「御城内絵図面」

（和田作図）

㉕

城下図・城郭図史料に見る松江城



堀尾期　京極期　正保期　享保期

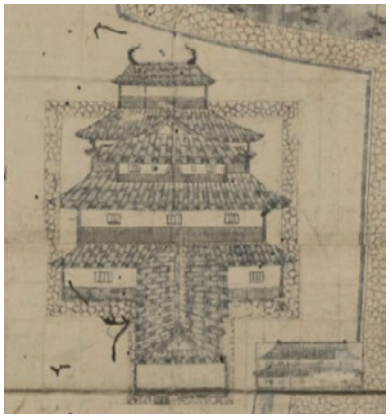
「寛永年間松江城家敷町之図」

「御城内絵図面」

「堀尾期松江城下絵図」　「出雲国松江城下絵図」

㉘

松江城天守の姿

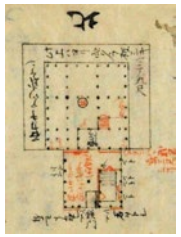


享保頃の松江城天守
（「御城内絵図面」）

現在の松江城天守
（平成24年8月撮影）

㉖

資料に見える松江城天守地階



『竹内右兵衛書つけ』
　作成年代　天和元年（1681）～元禄７年（1693）

『御本丸二ノ御丸三ノ丸共三枚之内』
　作成年代　寛文１１年（1671）～元禄７年（1693）

『松江城縄張図』
　作成年代　元禄１１年（1698）～宝永７年（1710）

報告３　「祈祷札の打付け位置について」

松江市松江城国宝化推進室長　卜　部　吉　博

失礼します。松江城国宝化推進室の卜部でございます。

それでは、今までのお話を踏まえまして、一体、祈祷札というものがどこに打ち付けられていたのかということについてお話をさせていただきたいと存じます。パワーポイントを使ってご説明いたします。

なぜその打ち付けられていた場所が問題になるのか、これが重要なのですが、先ほどからご説明をいただいているとおり、祈祷札そのものには、松江城という文字は全く出てきておりません。これは、先ほどの和田先生のお話には、祈祷札にその建物の名前が書いてあるものがありましたけれども、基本的には、多くの場合、その建物で祈祷をするわけで、一々これはどこどこのものだということを書く必要はさらさらないわけです。この辺がいわゆる棟札と違うところですね。棟札には必ず建物の名前が書いてありますけれども、それとは異なります。

先ほどの説明にもございましたけれども、昭和の解体修理のときには、松江城には祈祷札そのものがなかったということです。更に発見された場所は、松江神社でした。だから一般的に考えますと、これは松江神社のために祈祷されたものではないかということを考える人が普通だと思います。しかし、松江神社は、祈祷札に書かれている慶長16年には存在しておりません。ですから、これは松江神社のために祈祷されたものではないということは明らかであると思います。ただ、だからといって、それがすぐに松江城のために祈祷したものだということを証明するわけにはならない。そのためには、やっぱりきちんと説明のつく証拠が必要になってくるわけです。では、その証拠とは何だということでございます。

証拠は、先ほどの話にありました様に、２つあります。１つは、城戸久先生が『佛教藝術』に書かれている「昭和12年に松江城にあった。」ということ。それから、もう一つは、今、和田先生がお話しになりましたように、「御城内惣間数」に書かれている祈祷札が「轉讀大般若経」の祈祷札だということがわかっていますので、これで松江城にあったことがほぼ確定されてくるわけです。ただ、すべての人を納得させるためには、祈祷札を打ち付けた場所を特定しなければなりませんので、祈祷札に残されている釘穴と、一致する釘穴がある柱を見つけ出すという作業が必要となります。これをやらないと100％松江城のものだということにはならないということです。松江城国宝化推進室では、私と山本主幹と２人で、この祈祷札の打付け位置を探して参りました。そして結論から申し上げますと、去年の11月16日に、地階の塩蔵でこれを発見することができたということでございます。

この祈祷札の打付け場所をどのようにして見つけて、確認したのかでございますが、まず初めに、祈祷札の拓本をとりました。次にその拓本を段ボールに貼り付けました。そして、貼り付けた拓本

を祈祷札の大きさに切り抜いて、祈祷札の簡易なレプリカを作製したわけです。文字はついてないですけど、大きさや形、それから釘穴などをきちんと再現しました。

この拓本の釘穴の部分に爪楊枝を立てて、柱の釘穴に合わせてみるんですが、柱には幾つもの釘穴があります。柱の釘穴に祈祷札を合わせて、上と下の釘穴がきちんと合うところがないか調べることとしましたが、松江城には柱がたくさんございます。考えただけで気の遠くなるような作業となるはずでした。

ただ、先ほどからの話にあるようにヒントがございました。城戸久先生の論文には4階に祈祷札があったとあります。それから「御城内惣間数」では地階の塩蔵と4階にあったと書かれてあります。ですから、私たちはそこを探すことにしたわけですが、いかんせん、4階は柱が包板に覆われていて、ほとんど裸になっている柱がございません。それともう一つは、4階を含めて上の階の柱は、結構取り替えられているものが多く、釘穴を探すことが困難であるということで、まず地階の塩蔵に焦点を当てて作業をいたしました。

スライド⑤は、塩蔵の西側の柱で、「大般若経」の札の拓本を打ち付けた場所を見つけたところでございます。これは先ほど言いましたように、気の遠くなるような作業になるはずだったんですが、実のところは至極簡単に見つかりました。と言うのが、柱の真ん中の辺りを目標にして、上の釘穴の爪楊枝を動かしたらすぽっとはまるところがありまして、下の爪楊枝はどうかと思ったら、下の方もすぽっとはまりました。なかなか良いんじゃないかということで、遠くから眺めてみましたところ、ほぼ柱の中央で、しかも上部におさまったということでございました。運がよかったのは、柱の下の方を見ていただきますと、これは昭和の修理のときに接ぎ木をして取り替えているんです。ですから、もう少し柱の上まで接いでしまっていたら、もう確認はできなかったわけです。非常にラッキーだったと言えます。

次のスライド⑥が、東側の柱に「如意珠経」札の拓本を打ちつけているところです。こちらの柱にはほとんど釘穴というものがないのですが、拓本の下の釘穴の爪楊枝に合致する釘穴が、一つだけありました。この釘穴は、すぽっという感じで割と簡単に見つけたんですけど、ところが上の爪楊枝に合う釘穴が一つもないんですよ。これに対応するような釘穴が。それで困ったなと思っていまして、ここは非常に暗い所なので、懐中電灯で照らしながらの作業だったんですけども、実はこれは、後のスライドでもお見せしますけども、穴ではなくて、釘そのものが柱に残っていました。それから、これは暗くてわかりにくいんですが、柱のほぼ中央に昭和の修理のときの墨付が入っているんです。その中央にきちんとこの「如意珠経」札の拓本が乗っております。柱の中央に、しかも上端の位置も、ほぼ西側の「大般若経」札と同じ高さに打付けられていることがわかります。

スライド⑦は、東側の柱の状況ですが、この真ん中に縦に見える黒い線、これが先ほど言いました修理のときに中央に打たれた墨付の跡です。それから上下、2か所に釘が残っているのがわかりますでしょうか。この下の方の釘の根元に、ちゃんと爪楊枝が立つんです。上の釘は、折り曲げて打ち込んであります。それに柱と同じような色ですので、暗いとちょっとなかなか見えない。多分角釘だと思います。丸釘ではないと思います。

それから、こちらの下の釘穴を見ていただきたいと思います、これが釘の跡です。この釘穴の周りとその下の辺りに、何か黒い染み状のものが垂れているのがご覧いただけると思います。

それからスライド⑧が「如意珠経」札の裏側です。ここの黒いところに注目してください。釘穴から下に向けて流れた黒い染みがあるのがご覧になれます。これについては、まだ今後もう少し検討しないといけないと思いますけども、「如意珠経」札の黒い染みと、柱の黒い染みが一致するということは、釘穴の位置が一致するだけでなく、この祈祷札がここに打ちつけられていたということの証拠を補強することになると考えているところでございます。

それから、スライド⑨が配ってもらっている資料の写真と同じなんですけども、左側が「大般若経」札、右側が「如意珠経」札、そして真ん中に井戸がございます。地階の塩蔵の方へ入っていただくとすぐわかります。そこに、鳥居状に組まれている部材の、両端の太い柱に祈祷札が打ち付けてあったということになります。本日の会場の西側の壁に貼ってあるのが、その柱の拓本です。これは西先生のご指示で、２月４日、凄く寒い日だったんですが、山本主幹ととったもので、付箋が貼ってあるところが、釘穴です。それから資料に地階の平面図がありますけど、この赤い丸がしてあるところが、問題にしております柱でございます。この東西の２本の柱は地階と１階をつなぐ通し柱でございまして、これは太くて、しかも丸太に近い柱で、若干面取りはしてありますけども、四角に面取りがしてある柱ではありません。これらの柱は、以前私たちが発見した、分銅紋に「富」の刻印がある部材。すなわち富田城から持ってきた転用材ではないかと考えている部材とよく似た整形の仕方をされております。

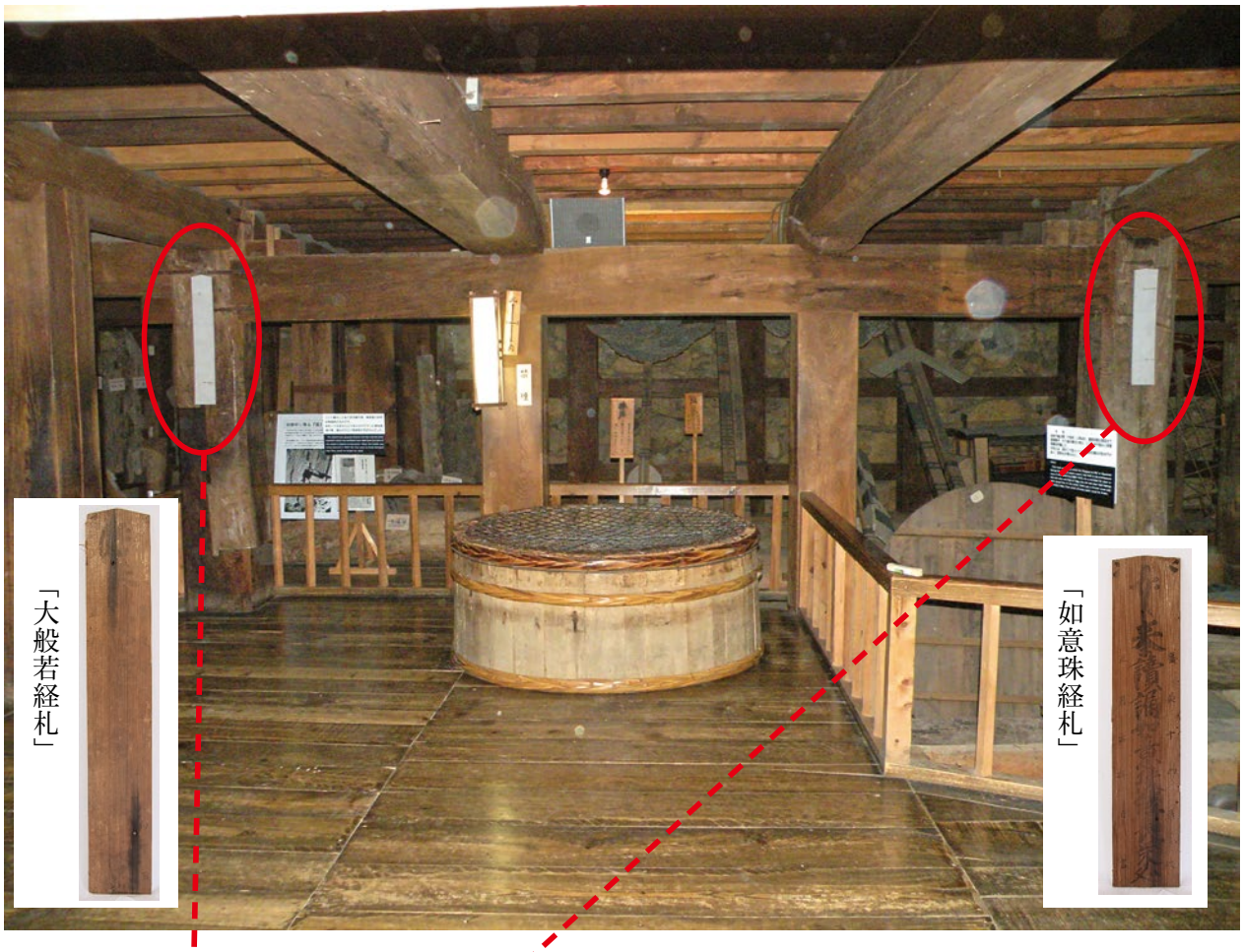
なお、東側の、この図面では右側の柱は、下の方に「六ノ六」という彫込番付がございます。西先生のご研究によりますと、松江城の下の階には彫込番付が多くついているのですが、上の階はほとんどが墨書番付になります。下の彫込番付は古いということを西先生も以前から研究されておりまして、正にこの「六ノ六」という彫込番付のある部材は、先ほどの「富」の刻印のある部材から類推しますと、これも同じような形態の部材ですので、松江城創建時の柱の生き残りであるという可能性が非常に強いわけです。そこに祈祷札が打ち付けられている。正にこれらの柱は、松江城を支える、いわゆる大黒柱のような位置付けの柱であるということが言えると思います。

配付資料にもう一つありますのが、昭和26年の松江城解体修理時の立柱祈祷会の写真でございます。松江市というのはこういう貴重な写真を、図面も含めて、昭和26年に調査して修理したときの資料をきちんと残しております。大変貴重な資料であるわけなんですが、こういう写真も出てきています。

両側に写っているのが、件の柱です。真ん中の柱は修理のときに新たに取り替えた柱です。この場所で護摩を焚いて立柱祈祷会をやっているということが重要なんです。江戸時代に松江城をつくるときも、こういう形かどうかはわかりませんが、これらの柱の前で祈祷がおこなわれたものと考えることができると思います。また、この柱に対する思いが、江戸時代と同じであったことをご理解いただけると思います。改めて、松江城の祈祷札がここに打ちつけられていたということの証ではないかと考える次第であります。以上でございます。

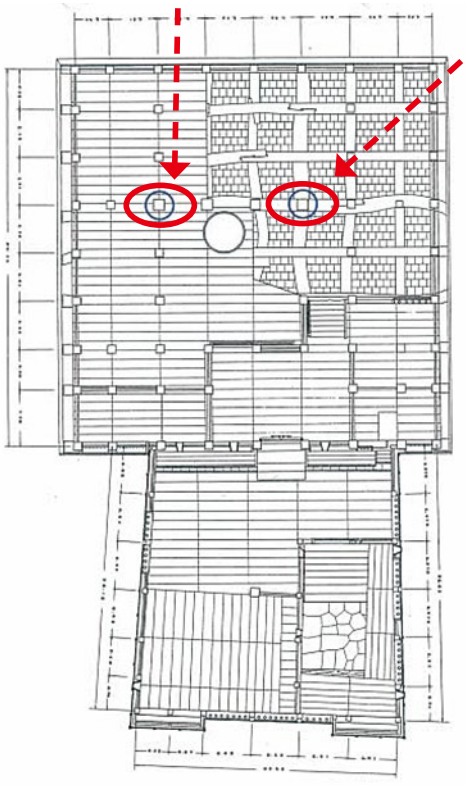
松江城調査報告会資料『祈祷札の打付け位置について』

天守地階塩蔵の間（入口から北方を望む）



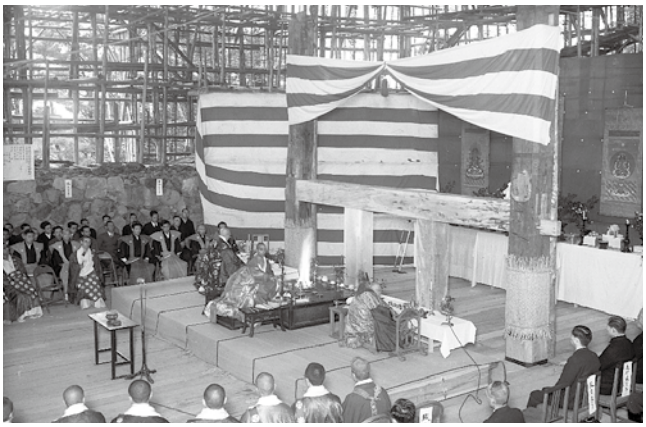
「大般若経札」

「如意珠経札」



該当の柱は、地階中央の天守最大柱２本（地～１階通し柱）で、昭和の解体修理でも取り替えられることなく、旧材が使用されていることが確認されている。

昭和の解体修理工事の際の地鎮立柱祈祷会（昭和26年11月29日）で使用されている。



①

松江城祈祷札の打ち付け位置について

松江城国宝化推進室

②

なぜ打ち付け位置（場所）が問題となるのか①

- 祈祷札には松江城とは書いてない。（何処の祈祷札にも建物の名称は書いてない。当該の建物で祈祷するものだから）
- 昭和の解体修理の時には松江城にはなかった。
- 発見されたのが、松江神社だったので松江神社のために祈祷されたものではないかと考える人もあるかも知れない。
- しかし、松江神社は祈祷札に書かれている慶長十六年には存在していないので、松江神社の為に祈祷されたものではないことは明らかである。
- だからと言って、すぐに松江城の為に祈祷したものだと言う訳にはいかない。
- その為には、きちんと説明のつく証拠が必要となる。
- では、その証拠とは？

③

なぜ打ち付け位置（場所）が問題となるのか②

- 証拠は二つある。
- 一つは城戸久先生が「昭和十二年7月」の松江城調査の時、四階に2枚の祈祷札があったことを『仏教芸術六十号』に記述されていること。
- 今ひとつは、和田先生が話された『御城内惣間数』に祈祷札があったと記されていること。
- でも、万人を納得させるには、祈祷札に残された釘穴と一致する釘穴を有する柱を見つけて打ち付け位置を確定する必要があった。
- 私たちは今回、この祈祷札の打ち付け位置を松江城の地階・塩蔵の間で発見することが出来た。

④

打ち付け位置の確認方法

- ①祈祷札の拓本を採る。
- ②祈祷札の拓本を段ボール紙に貼付ける。
- ③貼付けた拓本を切り抜き、祈祷札と同じ大きさにする。
- ④この拓本の釘穴の部分に爪楊枝を立てて、柱の釘穴に合わせてみる。
- ⑤④の作業の繰り返し。
- 考えただけで気の遠くなる作業。

⑦

東（右）側柱の状況

- 如意珠経札の打ち付けてあったと考えられる東（右）側柱の部分
- 上の写真は、祈祷札の上の釘穴に対応する場所にある釘の残存状況：釘は折り曲げて柱に打ち込んである。
- 下の写真は祈祷札の下の釘穴に対応する柱の釘穴の状況：穴から釘の錆なのか黒いシミが垂れている。

⑤

西（左）側柱の祈祷札打ち付け状況

- 大般若経札の拓本を貼付けたところ。
- 柱の中央、上部に位置している。
- 左下の色の変わっている部分は昭和の修理で接ぎ木を行ったところ。

⑧

如意珠経札の裏面

- 下の釘穴から下に黒いシミが垂れている。
- 柱の釘穴から下に垂れているシミと対応するものか。

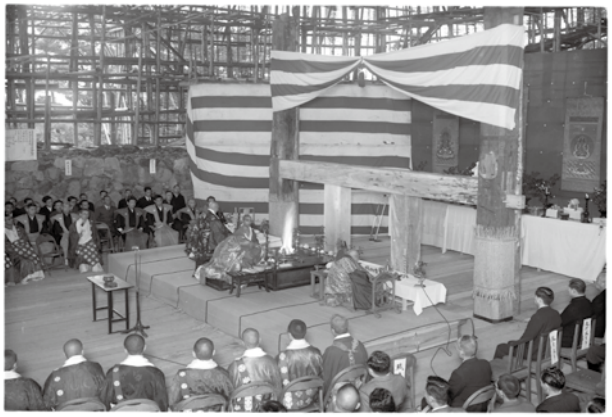
⑥

東（右）側柱の祈祷札打ち付け状況

- 如意珠経札の拓本の打ち付け状況
- 柱の中心に、上端の位置もほぼ西の大般若経札と同じ高さに打ち付けられている。

⑪

地鎮立柱祈祷会（昭和26年11月29日）の様子



⑨

天守地階塩蔵の間（入り口から北方を望む　左：大般若札、右：如意珠札）

⑩

附櫓と地階塩蔵の平面図

- 祈祷札の打ち付けてあった東西二本の柱は地階と1階をつら抜く通し柱で松江城の大黒柱とも言うことが出来よう。
- 太く、四角に面取りがなされていない。
- 東（右）の柱には「六ノ六」の彫り込み番付けが認められる。
- 創建時の可能性がある柱である。

報告４　「天守調査と祈祷札のもつ意義について」

神奈川大学名誉教授　西　　和　夫

ご紹介いただきました西でございます。私は、パワーポイントも資料もなしでお話をさせていただきますので、ご了承くださいますようお願いします。

テーマは、「天守調査と祈祷札のもつ意義について」ということで用意されておりますけれども、少しつけ加えさせていただきたいと思います。天守調査と祈祷札のもつ意義、そして松江城天守の評価について、更には松江の町との関係についてというように、少しテーマを広げて話をさせていただきたいと考えます。

既にご報告いただいたように、今回の報告会の中心は２枚の祈祷札です。祈祷札が出てきて、その結果、今まで言われていた天守の価値が一段と高まったということでありますが、今日のご報告に話が出ておりますけども、２枚の祈祷札は、これだけでは、決定的な資料にはなりません。例えば、最初にお話しいただいた稲田室長さんの資料をご覧いただきたいのですが、この資料の３ページに祈祷札に書かれている文字を翻刻、即ち書き写してくださいましたが、少なくとも３つの問題点があります。

１つは、先程の卜部室長さんもお話しになりましたが、この祈祷札には松江という言葉も、松江城という言葉も出てこない。ましてや天守という言葉も出てきません。だから、これが２枚とも松江城の天守のものなのか、本当にそうなのかなというように、疑えば疑えるものなんですね。これをどうやって天守に結び付けて考えるか、これが１つの課題になります。

それから、２つ目は、これを天守と結びつけて考えたとして、これが天守の完成とどう関係するのか、それを直接示す文言は全くありません。これはご祈祷をしたということがわかるだけの２枚の札であって、たとえ天守と結びつけて考えたとしても、天守の完成と結び付ける材料に乏しい。これが２つ目の問題点。

更には、今日、和田先生が報告された江戸後期の文献資料がありますが、そこには４階と塩蔵に札があると書いてあるわけです。これは卜部室長さんの先程のご報告にあったように、２枚とも地階の塩蔵にあったと考えているわけですが、そうすると、あの文献とは違うじゃないか、あの文献には４階と塩蔵にあると書いてあるのに、今日の報告では２枚とも地階にあったという話で、これは矛盾していないかと言えないこともない。細かいことまで言い出すとまだまだございますけれども、少なくともこの３つぐらいは、きちんと説明ができなければいけないわけです。

既に今までの報告で説明があったわけですが、少し付け加えますと、ほかの祈祷札の例を調べて、ほかにも祈祷札だけど建物の名前が全くないものがあるのかを調べてみますと、そういうのは幾らでもあります。卜部室長さんは、これはこの建物のためのものとわかり切っているから書かないの

だと説明されましたが、まさにそのとおりで、祈祷札だけでなく棟札もそうなんです。棟札でさえその建物の名前が全くないものは珍しくありません。なぜかというと、これはその建物につけるのがわかり切っているからいちいち書かないようでありますが、そういう例がほかにもたくさんあります。しかも、その祈祷札が建物の年代判定に使われている例も、これは文化庁がつくっている目録を調べれば出て参りますが、例が幾らでもあります。だから、はっきり名前が出てこないからといって全く無関係のものだということにはなりません。むしろ、こんなものを無関係につくる方が珍しいと考えた方がいいでしょう。

次に、完成のときと結び付くかという点ですが、これについてもほかの例を調べてみますと、これは卜部室長さんが詳しく説明なさいましたから、これは天守のものと考えざるを得ないわけですが、例えば日光東照宮の詳しい日記がありまして、「御番所日記」という日記が残っていますが、東照宮を修理したときのことが、細かく書かれています。その日記を見ていると、何と大般若経600部の転読をやっているんですね、東照宮で。

大般若経の転読というのは、ご存じだと思いますが、600部ものお経を全部読むのは大変だから、お経をパラパラとやって読んだことにするんですね。これを日光東照宮でも完成したときにやっております。東照宮ですから、お寺じゃないけれども、やっているのは輪王寺という天台のお寺ですから、天台に共通する要素だとこう考えていいかとも思います。このように建物完成のときに大般若経600部の転読をやっている例もあるわけで、ですから、そういうことを考えれば、２つ目の完成と結び付けていいかということについては、ほかの例からも説明ができるわけです。

それから、３つ目の、文献には４階と塩蔵と書いてあるのに２枚とも塩蔵にあったということでいいのかという点です。これは、はっきりした説明がつかないのですが、先ほど卜部室長さんが詳しく説明してくださいましたように、あの２本の柱はまさに松江城の大黒柱と呼ぶべき柱でありまして、天守の部材をほどいていくとあの２本が最後に残るんですね。解体修理の記録見るとそれがよくわかります。ですから、私は最初にあの２本の柱につけられていて、時代が下ってから１枚は４階に行ったのかなと、これは推測ですが、そのように考えています。この２枚の祈祷札、大変に価値の高い資料が出てきたわけですけれども、考えなければならない課題も少しは残っています。これをこれから詰めていかなければいけないと考えているところです。いずれにしても、松江市民の悲願である国宝化に向けてどうやって進んでいくかということもありますが、国宝化を唱えるだけでは進まないので、地道な調査と研究にしっかりと取り組んで、松江城天守の理解、また松江城全体の理解をしっかりやらなければいけないというのが、意義というところに含まれてくるでしょう。

今まで私は何回か「松江城について考える市民の集い」でもご報告をして、松江城を大切にしていくということが基本になければ、天守の国宝化も難しいというお話をさせていただいたんですが、まずは市民あるいは行政全体で天守を正しく理解する、そして正しく評価をする、これが基本になると考えています。だから、しっかり調査もやりましょうということをお話ししたわけですが、まだまだ正しい理解、正しい評価は定着していないと思います。これは、これからもまだまだ続けていかなければいけないと思います。

なぜそんなことを言うのかとおっしゃるかもしれませんが、この市民活動センターの１階に幾つかリーフレットが置いてありまして、先程、ちょっと確認しました。これは皆さんもよくご存じの、

松江城天守の案内リーフレットです。これ見ると、内側にいろんなことが説明してある。私は、おやっと思いました。というのは、例えば柱は寄木柱ですと書いてある。写真まで入れて。これは、今まで報告を何回もさせていただきましたから、それをお聞きいただいた方はおわかりかと思うんですが、松江城天守の柱は寄木柱ではありません。そして、これが構造的に効くんだという説明されていますが、構造解析も行われましたけれども、これは構造的にはあまり効かないということがわかりました。

昭和25年から30年に行われた昭和修理のときに、あれを全部撤去しようということになりました。修理担当者が、その当時の文化財保護委員会に全部取りますという報告をしたときに、その方向でオーケーが出て、全部取ることになりました。全部取ってもいいわけですから、構造的には効いていないし、取ってもいいものが寄木柱の部材であるわけがない。寄木柱というのは、材を寄せ木にして柱になっている材ですから、取ってしまうわけにはいかないものですが、取ろうと決めたわけですから、これは寄木柱ではないということの証拠になるわけです。

これについては、昭和修理の資料の中に、当時の文化財保護委員会と松江城の修理事務所とのやりとりの手紙がたくさん残っておりまして、取ることになっていたんだけど、東京の文化財保護委員会の委員のある先生が、くっついているのだからそのままにしといたらとおっしゃったらしいんですね。それで急遽、取るのをやめなさいという指示が来ます。５階は取っています。寄木柱だと思われているあの柱、あれは包板といいますが、この板を、５階は取ってしまったけど、下の方の階は取るのをやめたので、今もついています。その板がついているのを見て、今も寄木柱ですって解説していますが、あれは全くの間違いです。そういうことがおこなわれている限りは、これでは国宝化の道のりはまだまだ遠い。しっかり正しく理解して、そして正しい評価をしないとだめなのです。

あるいはこのリーフレット、ほかにも色々なことが書いてあるんですが、天守の特色が幾つか書いてあります。松江城の天守の特色は、まず第一に構造的な特色、これが一番の特色なんですね。ところがそのことが全く書いてない。これも、これからみんなで正しい理解にしていくということにつなげていきたいと思っています。また、前にお話をしましたけども、このリーフレットに古さが４番目であると書いてあるんですね。だけど、簡単に４番目なんて言えないっていうことも詳しくお話をしました。文化庁の目録を見ると、４番目ではないですね。じゃあそれは一体どういうことか、今ここで繰り返しませんけども、そういうしっかりした理解をしなければいけないし、このリーフレットには松江の町との関連、城下町との関連が全く出てこない。ところが、松江城、これは城下町と一体になって評価すべきものでありまして、そういう視野を広げた理解をしなければいけないと私は思っています。

また、これは松江歴史館のリーフレットですが、サブタイトルに「お城の見える博物館」と書いてあります。ところが、これにはどこにも天守のこと、お城のことは出てこない。お城が見える博物館をうたうのなら、お城の写真ぐらい載せたらいいのにと思うわけですが、そういう視点がない。

つまり、私がここで強くお話ししたいのは、松江城の天守が大事だということ、大切にしようということは、皆さん共通の理解ですけれども、松江城天守だけを、それだけを大事にするということではないんですね。大切なのは、松江は城下町ですから、松江の町の中に、きちんと天守を位置

付けて、それを地域や町全体を視野に入れながら大事にしていこうと考えること。それが一番大事なことだろうと考えておりまして、今回祈祷札が出てきて、これは素晴らしいことですけれども、それで万事終わりというのではなくて、みんなで天守をもっともっと深く理解する、そして正しい理解にしていきたいと、こう考えているところです。

この会場の１階にあったリーフレットで、もう一つお話をさせていただきますと、こういうのも置いてありました。まつえ市民大学の案内リーフレットです。これを見ると、市民大学のコースがいろいろ用意されていまして、ふるさと発見コースというのがあります。ふるさとの歴史、文化、産業など幅広い地域学講座をやります、こう書いてあります。あるいはふるさとづくりコースというのもありまして、ふるさとの宝を再発見し、まちづくりにつなげていくと書いてあります。これはとても大事なことで、町をしっかり見直して、我々の町、松江はどういう町なのかを再認識する。ただし、これを読むと、対象はご老人ですよと書いてあるんです。そうじゃないでしょう。町の人みんなが対象の筈なんです。町の人みんなが、ふるさとづくり、ふるさと発見を一緒になってやって、そうした中に松江城も、松江城天守も位置付けていく。そして松江城の天守が大事だということをしっかり認識していくことが必要だと思います。今回の祈祷札の発見は、それを更に確固たるものにする一歩になれば、これは大きな意義があると私は考えているわけでして、祈祷札が出てきたのは素晴らしいことなんだけれども、これから、そういったことまでみんなで考えていきましょうということをお話しして、私の報告にさせていただきます。ありがとうございました。

「松江城調査報告会」パネルディスカッション記録

日　　時：平成25年３月19日（火）14：40～16：10
会　　場：松江市市民活動センター　５階交流ホール
コーディネーター：亀井伸雄氏
パネリスト：西和夫氏、和田嘉宥氏、稲田信氏、卜部吉博氏

司会

それでは、調査報告会を再開いたします。

これから、先ほどの基調報告を受けてのパネルディスカッションに移りますが、このコーディネーターを、国立文化財機構東京文化財研究所の亀井伸雄所長にお務めいただきます。

亀井所長様は、文化庁建造物課長や文化財鑑査官などを歴任された文化財行政のエキスパートでいらっしゃいますと同時に、学術研究の分野でも指導的な役割を果たしていらっしゃいます。当市におきましては、松江城調査研究委員会委員、重要文化財松江城天守保存活用計画策定委員会委員などもお務めいただいております。

また、パネリストは、先ほどご報告をいただいた西和夫先生、和田嘉宥先生、稲田室長、卜部室長の４名の皆様です。

それでは、亀井所長様、よろしくお願いいたします。

亀井伸雄氏

こんにちは。ただいまご紹介いただきました東京文化財研究所の所長をしております亀井と申します。

私、30数年間、文化庁で文化財の担当をして参りました。とりわけ建造物関係につきましては、重要文化財の指定や保存修理、あるいは伝統的建造物群のことを申しますけれども、町並み保存というような仕事をやって参りました。松江市で松江城の調査を始めるというご相談があったときに、何人かの先生方を推薦させていただきまして、委員長としては、先ほど、本当に厳しいけれども温かいメッセージいただきました西先生にお願いをしたところです。西先生は、日本建築の大家でいらっしゃいまして、城郭はもとより日本建築全般について非常に造詣の深い方で、全国的な視野、視点を持っておられるという方でございます。それとともに、地元にもやはり造詣の深い人がいるはずだから、ぜひそういう方にも参加をしていただいて、この際、徹底的に調べてもらおうというふうにお願いしたわけです。そこで名前が上がりましたのは、米子高専の名誉教授でいらっしゃいます和田先生などの先生方でございました。それから、卜部室長さんは、文化財の専門家でいらっしゃいます。このように、現在考えられる地元のあるいは全国的な視野をお持ちの優秀な人材を集めて調査に取り組んでいるところですが、松江市の市長さんを初め、

市民の皆さんの意気込みを非常に強く感じながら我々も動いてきたところです。

ただ、松江城の国宝化を目指すということは、これは先程、西先生も言われましたけれども、それはやっぱり手段であって目的ではないわけです。もっともっと市民の皆さんと行政の皆さんが、力をあわせて城下町松江、あるいはそれ以前からの歴史を大事にしながら未来につなぐまちづくりをすることが望まれるわけです。その一つの拠りどころとして松江城が、あるいは天守があるわけで、そういう視点でもって、もう少し町全体を見ながら考えていく必要があると思っています。

それから、先ほど話のあった松江城のパンフレットの一つ一つにしても、より細心の注意を払いながら、きちっと確認しながら作りこんでいくことで、さすが松江というのは歴史・文化に立脚した町づくりをやっているなと、見る者にも響くものがあるということになってくるかと思います。その辺を是非改めていただきまして、予算もかかる話ではありますが、将来の松江をつくるんだということで、思いも新たに取り組んでいただけたらと思いますし、今回始まったこの松江城の調査が、松江のまちづくりを進めるうえでの一つの起爆剤になればいいなと思っています。

それから、この機会に国宝というのはどういうものかについて、私の方から説明させていただきます。

国宝については、まず昭和４年に国宝保存法というのができました。それによって、国指定の美術工芸品、建造物がそれ以降すべて国宝に位置付けられました。終戦当時、美術工芸品と建造物合わせて7,000件以上の国宝がありましたが、戦争中の非常に混乱した時期に充分保存管理ができずに荒廃しているものも多く、終戦後間もなく、これを早急に保存修理していかなければならないというわけで、国宝緊急修理５カ年計画が立案されました。一方、GHQはこれに対して国宝の数をもっと絞るべきだと、これは事実かどうかはわかりませんが1,000件位に絞ったらどうかというような意見が出ていたようであります。

それからもう一つ、昭和の大恐慌のときに、日本の重要美術品がどんどん海外に流れていってしまったということがありました。それにストップかけるため、昭和８年に重要美術品等の保存に関する法律というものをつくって、緊急に、これは大事、これは大事というように次々に認定したわけです。認定されたものを海外に輸出する場合には主務大臣の承認が要るということで歯止めをかけたんです。

それらの戦後処理といいますか、改めて整理しようということで考え出されたのが、現在の国宝・重要文化財という二段階指定になります。重要文化財に一旦指定して、その中で特に世界文化の見地から価値を有する重要なものについては国宝にするということであります。また、法律的には、文化庁長官は命令権を持っていまして、もし国宝に指定されている物件が非常に危機的な状況にあるという場合には、国が所有者に成り代わって修理をすることができる規定があります。その修理した後、経費については所有者から徴収するということでありますが、何が何でも国が責任を持って守る、それだけ重要なもの、それが国宝であるという位置付けになっています。重要文化財の方は、もし修理が必要だったら助言とか勧告とかその程度にとどまって、あくまで所有者の責任でもって守っていただきたいという法律の趣旨になっています。ですから、法律的には大きな強権が国宝の方には付与されているというものであります。

従来の国宝の切り分けといいますか、国宝と重要文化財の見直しは、昭和25年に文化財保護法

ができまして、事務局の方で昭和26年から取り組んだわけですが、最初の３、４年を境に、概ね昭和30年代前半までに大体重要なものを国宝にすることで整理されました。それ以降、最近もありますけれども、学術的な調査結果で一定程度の価値が定まった、あるいはこれまでの重要文化財に比べて抜きん出た価値があるということが判断されたものについては、文化審議会の方の意見を聞きながら対応しています。

先ほど西先生の話の中で、昭和の解体修理工事の際に当時の文化財保護委員会のある委員から、松江城の包板はあったものだからそのまま残したらどうだという意見が出たという話がありました。この委員の先生方の意見というのは非常に重要なんですね。それに逆らってまでやるだけの能力が事務局にあるかというと、それを上回る先生方を置いているからこそ審議会であるわけですから、それを覆すというのは、とてもできないわけです。したがって、委員のある先生が言われて、同調する先生がおられたならば、それはそのままやるというのが文化財行政なんですね。それは動かざることであるわけです。

したがって、お願いします、お願いしますということで運動を幾らやっても、価値判断ということが伴いますので、事務的な判断だけではなく、権威ある先生方の総意でもっていくということになりますので、国宝にするということは非常にハードルが高いと言わざるを得ません。しかし、そこに国宝という制度がある以上は、やはり皆さんには頑張っていただきたいというふうに思います。

今回、見つかった祈祷札が恐らく松江城のものであるということに、皆さん確信を持たれたことと思います。私も間違いないだろうと思っておりますけども、建物では何年ごろ建てたというのと何年に立柱したかということの差ですが、これは物凄い差ですね。十あるうちで、年代のはっきりしているものが一つあるならば、ほかの九つがいかに優秀なものであっても、基準尺として評価が大変高くなります。したがって、この祈祷札が見つかって、それが松江城の完成のときのものとしてまず間違いないということがわかったことは大変素晴らしいことだと思うんです。

そういうことを前段といたしまして、これから報告者の皆さんにいろいろ質問等をしたいと思います。皆さんにはそれぞれ限られた時間内でお話しされましたけれども、まだまだ話し足りないことが多々あろうかと思います。お一人５分ぐらいずつ、追加するようなことがあればお願いしたいと思っております。

まず、稲田室長さん、いかがでしょうか。

稲田　信氏

はい、それでは私の方からは、松江城を築城しました堀尾氏と、それから祈祷札の関係で出てきました高野山真言宗との関係について、少し追加させていただきたいと思います。

今回、祈祷札が見つかりまして、宗教的な背景を考えるときに、１つには大山寺という文字が書いてありましたが、もう一方は高野山真言宗ではないかということをおっしゃる方が、この発見当時からいらっしゃいました。そこで、高野山と堀尾氏の関係につきましていろいろ調査したいと考えまして、実際に高野山まで出向いて調査をいたしました。（西尾克己、稲田　信、木下　誠「高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について」『松江歴史館研究紀要』第３号　松江歴史館　2013　参照）

近世大名というのは、高野山に大きな供養塔を建てるという一般的な習わしがありますが、堀尾氏もこの高野山に宿坊を置きます。菩提寺に相当するものでしょうか、宿坊と呼んでおりますが、

龍生院という宿坊に堀尾氏のお墓を管理してもらっていたという関係がございます。

少し時代が堀尾氏の時代からは下りますが、天保10年（1839）、高野山があります紀州藩が編纂しました『紀伊續風土記』というのがございます。非常に詳しい資料ですが、その中にこの龍生院について記してありまして、内容は、堀尾吉晴は非常に信仰心が厚くて、宮殿、つまりお寺を修復し、正五九の月と言いますから正月と５月と９月には、「武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す」ということで、いわゆる祈願、祈祷のようなことを、高野山のお寺でしてもらったということが記されております。

松江城天守の鬼門に当たるところには千手院が置かれ、それから裏鬼門には報恩寺が置かれたということは先ほどお話ししたところですが、そういう意味では、堀尾氏、そして松江城天守は、高野山真言宗との関係が非常に深いということが明らかであるということを付け加えさせていただきたいと思います。以上です。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。それでは、和田先生、お願いいたします。

和田嘉宥氏

私は松江城の天守だけではなくて、松江城全体の推移についていろいろ調べています。関連する史料としては、例えば昭和の解体修理工事の報告書とかそれに類するもの、また今日ご紹介したような文献史料、あるいは城下絵図ですとか城郭図、それから作事関連の史料とかをいろいろと調べていますが、そういったものを探してみても、なかなか堀尾時代のことは確認できません。それが松平の時代になると、城の修理に関する記述が、関連の史料の中にいろいろと出てきています。そういったものを見ますと、ほぼいつごろ重点的に修理が行われたかがわかってきます。松江城の三の丸はいつごろ整備されたのか、この度三の丸で石垣の遺構が出てきて、それがいつの時代のものかということが問題になってきますけれども、松江城の天守は、ほぼ18世紀の半ばぐらいに修理をひと通りやっていることが、史料を調べるとわかってきます。そうした修理がひと通り終わった段階で、恐らく今日ご紹介した『御城内惣間数』がまとめられたのだろうというふうに見ています。そこでは松江城についての情報が、ある程度整理されて、いろいろと記録されていく。これは実測調査などを踏まえたもので、詳しく記されているということがわかってきました。

そうして調べていくと、例えば『御作事所御役人帳』という史料などを見ると、「城普請」という役職のものが、松平直政の時代からどんどん雇われていくようになってきまして、次第に多くなっていくことがわかります。「城普請」ですから、やはり城の修理といったことを主とするもので、大工のお手伝いとかそういったものだと思いますが、次第に多くなってまいります。これは何らかの形で松江城を維持管理していく、天守を維持管理していくという役割で増やされたのではないかと考えられるわけです。そういうような職人がずっと直属で雇われていて、それは終生変わらない。「御大工」は変わる場合もあったりしますが、「城普請」の場合は江戸時代を通して世襲です。「城普請」については、もう少しいろいろ調べてみないといけませんけれども、重要な任務にあたっていたと思われます。

また、『列士録』など別の史料には、例えば「天守鍵預」といった役職が出てきますが、これはやはり、天守をきちんと守らなければならないということが徹底していたことの現れのようです。

松平の時代になると、天守は城の中心にありながら、象徴的なものに変わっていきます。本来は戦闘のための施設であるわけですが、次第に象徴としてのものに変わって、「天守鍵預」という役職が設けられ、これを守っていこうという意識が強くなっていったということです。そのような意識が、藩の中に芽生えて、天守を維持していこうという動きが強くなっていったと考えられます。

そうして、それを踏まえて、どのようにして維持されてきたかということも重要な課題だと思います。松江城が創建当時の姿をそのまま維持しているかどうかという問題にもなりますが、基本的には松平直政の時代からは、姿形が変わっていないということが、こういった史料からわかってきます。そうしてみると、先ほどの地階の２本の柱が非常に重要な柱だということもわかってきて、こういった重要な部分は、きちんと維持されて継承されているというふうに認識しております。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。先ほど釘穴というのはあっさり見つけたということでしたけれども、まだ言い足りないことたくさんあるのではないかと思います。卜部室長、何かありませんか。

卜部吉博氏

ただひたすら寒かったというのが感想ですけれども、私は建築の方は全く学がありませんので、足で稼ぐしかないというのがモットーです。ですからこういった形で調査をしたところであります。

先ほど西先生の方から祈祷札の類例で、建物の名前がついているか、ついていないかということのお話がありました。実はお城の祈祷札で、それがお城の重要文化財の附指定で重要文化財になっているものが１枚だけあります。これは、祈祷札という呼び方ではなく、木札ということで附指定されているんですが、丸亀城天守のものでございます。この丸亀城天守の祈祷札についても、私ども松江城国宝化推進室で調査に出かけまして、実測と写真撮影等をさせていただきました。

この丸亀城天守の祈祷札にも、丸亀城という言葉は一つも入っておりません。梵字と以字点があって、「奉拝祈七夜待皈命月光」云々とそういうことが書かれています。

これがどうして附指定になったのかというと、解体修理のときに天守の土壁の中に塗り込めてあるのが見つかりまして、それで附指定となったものです。先ほど申しましたとおり、ここにも丸亀城という言葉は全く書かれてありませんので、これはそういう意味でも、類例として貴重な史料になろうかと思います。

大きさでいうと、松江城の「如意珠経」札とほぼ同じぐらいの大きさで、「萬治第三天」という銘があるんですけども、ここで注目されるのは、松江藩主だった京極氏が一度は改易され、後に転封されて、再び取り立てられて丸亀に行くわけです。そうすると松江城の天守でこのような祈祷札を見ていた人が、天守完成の際にはこういう行為をするものだと思っていたかもしれないなと、これは個人的な感想です。そういう思いがあります。

それと、もう一つ、先ほど稲田室長の報告に信仰の話が出ました。堀尾家は真言宗との関係が深いと。ところが、先ほど和田先生もおっしゃったわけですけど、「大般若経」札の方には、これは「大山寺敬白」と記されていまして、大山寺から来ているわけですね。大山寺は天台宗の別格本山ですから、何故天台宗なのかということになると思います。これは非常に重要な問題だと思うんですが、先ほどもありましたように、慶長時代の頃というのは、大山寺も大きな動きをしている時代であります。

それは、豪円が中興開山として大山寺に入るということです。先ほどもお話にありましたけれど、

豪円山はスキーをされる方はよくご存じでしょうが、「豪円」の名が付くほど、大山寺にとっては重要なお坊さんです。この人が、大山寺に入って、ここの復興をやります。それ以前はどうだったかっていうと、この人は比叡山の信長の焼き討ちの後、その比叡山の復興に尽力しています。あわせて、この前火事で焼けてしまいましたけど、備前の金山寺、ここも復興をやるんです。大山寺の寺領を米子藩主の中村氏が、全部自分の所領にしようとしたところ、豪円が徳川幕府に訴えて、幕府から三千石の所領安堵の朱印状をもらっているんですね。そういう経過からも、大山寺と徳川幕府とが、非常に強くつながっていたということが言えます

もう一つ、備前金山寺というのは宇喜多氏が庇護していたんですけど、この寺の復興もおこなった。その宇喜多氏が滅んで徳川幕府になったときに、これも一度寺領を没収されたわけです。それを豪円が、これは宇喜多氏からもらった寺領ではないんだと、もともと古来からずっと持っていた寺領なので、そのままにして欲しいと訴えて、これも三千石安堵の朱印状をもらっています。これは金山寺だけではなく、ほかの神社、社寺仏閣も含めての石高ですが、そういう経過があって、それなりに深い関係が徳川幕府との間にあります。

それから、徳川幕府の初代、２代、３代将軍のブレーンとして、怪僧と呼ばれている南光坊天海というお坊さんがいますけども、この人は、天台宗のお坊さんですね。この人と豪円というのは一歳違い、豪円の方が一歳年上です。ただ、天海が107歳まで生きたのに対して、豪円は早く慶長16年に亡くなっているんですけれども、共に比叡山の復興を手掛けています。そういう関係がございます。

また、あまり知られていないことですけども、大山寺の中興初代座主は豪円です。２代は久運というお坊さんがやっております。そして３代目の座主は、何とこの天海が座主になっています。これは名目だけで、天海自身は大山寺には来てないんです。代理人を立てておりますけども、天海が大山寺の座主におさまっている。そういう、大山寺と幕府との関係があって、堀尾氏としては徳川幕府によしみの通じるという意味で、大山寺に祈祷をお願いしたということじゃないかということでございます。少し長くなりました。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。最後に、西先生、今日は「天守調査と祈祷札のもつ意義について」ということでお話しいただきましたが、天守調査の結果については何回か皆さんにお話しされていると思いますけども、ここで改めて、調査を通じてわかったことを中心に少しお話しいただけますでしょうか。

西　和夫氏

調査でわかったことは、今まで何回か市民の集いなどでご報告させていただきましたが、まだお聞きになってない方ももちろんいらっしゃいますので、かいつまんで話をしますと、とにかく一番頼りになったのは昭和修理の時の資料でありました。昭和25年から30年に大々的に修理が行われて、その時どういう修理をしたか。かなり材木を取り替えていますが、どれとどれが取替材なのかというようなことが、昭和修理資料と呼んでおきますが、この資料を分析することによってわかって参りました。そうしてわかってきたことと今現在の天守とを比較して、また色々なことがわかってきました。

幾つかお話ししますと、最上階、５階の柱だけが削って細くしてある。これは現地に行ってもなかなかわからないのですが、松江城天守の特色は、柱に長い柱が使ってあるかっていうと、最大で２階分の柱しか使ってありません。例えば姫路城の場合は、下から６階の床まで２本の長い太い柱が使ってあって、これが大黒柱的な役割を果たしているけれど、松江城天守の場合は、そういう長いものは使っていない。最大で２階分です。２階分の通し柱を実に上手に配置して、全体の荷重をうまく支えている、これが特色なのですが、その一番上の４階、５階の２階分の通し柱が、どういうわけか５階の部分だけ削って細くしてあります。これは理由がわかりません。ただ、同じようなことをやっている例が一つわかりました。それは姫路城です。姫路城のあの大天守も、一番上の階の外回りの柱をどういうわけか削って細くしてあります。現地で修理担当者から色々説明をしていただきましたが、多分これは外を眺めるために、眺望のために細く削ったのだろうと考えられているようでして、松江城の場合もそういう理由が一つ考えられるわけです。眺望のために柱を削って、外を見えやすくしたのかもしれません。これがわかったことの一つです。

それから松江城の部材は、１、２階と３階以上で、様子が随分違います。例えば、柱には番付というものが打ってあって、これは、これから組み立てるというときに、この柱はここに立てるというようなことをちゃんと材木に書いておく、そういうことを通常の木造建築でも普通にやりますが、１、２階については彫込番付といって、文字が彫り込んであるんですね、なかなかいい字で彫り込んであります。ところが３階から上は、彫り込みじゃなくて墨の文字で書いてある。墨書番付と言います。それが一つ、明らかに違うところです。また、部材を見ただけでも、１、２階は、必ずしも製材したきれいな材ではないものがたくさん使われている。それに対して３階から上は、製材して、きれいな材が主に使われている、特に最上階は完全にきれいな材を使っている。そういう違いがあることがわかってきました。

先ほど少し話に出ましたが、今、天守の地階に、前の昭和修理で取り替えて使わなくなった材が幾つか置いてありますが、その中に、断面、つまり切り口に「富」の字の刻印が打ってある材があります。これは今、１本しかないのですが、修理工事報告書にはそれとは違う材の写真が載っていますので、「富」の刻印がある部材は少なくとも２本はあったようです。これは製材したきちんとした材じゃないですね、自然の木に近い材。それと「富」の字の刻印を重ね合わせると、これは推測ですが、富田城から材木を持ってきたという言い伝えがありますので、本当にそうなのかも知れない。かも知れないということで、それをはっきり裏付けるところまでは行っておりませんが、建設の背景が少し読めてきた。これが、わかってきたことの一つです。

それから、これは現地で今見てもわからないのですが、昭和修理で色々なことがされていまして、報告書にも書いてないことで色々と手が加えられている。例えば附櫓という入り口の部分ですが、あの石垣の中は鉄筋コンクリート､RC工法で補強してありますが、外から見てもわかりません。それをきちんと知った上で、今後の修理なども考えていかなければいけないんですが、このような報告書にも書いてないような、色々な処置が施されているということがなぜわかったかというと、昭和修理の資料が出てきたからです。昭和修理のときの資料は２種類ありまして、一つは、お城の中の倉庫に入っていたものです。それからもう一つは、工事主任の井上梅三さんという方、この方が個人でお持ちだった資料です。井上さんは最晩年、江津に住んでおられまして、井上さんの亡く

なられた後にお住まいが取り壊された際に、井上さんがあちこちの修理主任をされていたので、それらの修理資料がごみとして捨てられた。それを江津の心ある人たちが廃棄物処理場まで追いかけて回収されて、資料として保護してくださった。その中に松江城の修理関係の資料が含まれていたんです。これは非常に貴重なもので、昭和修理の様子がよくわかるんですが、これはとても大事なものですので、きちんとした形で報告しておくのがいいなと考えています。

それに関してもう一つお伝えしておきますと、本丸の入口にある入場券を売っている券売所のところから、少し入った右手に休憩所があります。櫓の形をしていますから、いかにも古そうですけれども、あれは古いものではない。昭和修理の後に建てたものです。あの休憩所に使ってある材木は、昭和修理で不要になった、つまり新材に取り替えたので使わなくなった材を使って休憩所を建てています。ですから、あの休憩所をよく見ると、あちこちに埋木（彫った穴を埋めた木）がある。それを見える範囲で調べました。

解体修理をやりますと、材木を取り替えます。折れていたり虫食いで欠けたりして、もう使えないというものは処分するのですが、それでも大事だと判断したものは屋根裏や床下に入れてとっておいたりいたします。松江城天守の場合は、屋根裏でも床下でもなく休憩所にそれを再利用したということで、休憩所そのものが、ある意味では貴重な松江城史料なのです。このようなこともわかりました。

調べれば色々なことがわかっ参ります。わかってくると、それに連鎖して新しいことがまたわかってきます。そのようなことを経験いたしました。

亀井伸雄氏

どうもありがとうございました。各パネラーにそれぞれ付け加えていただきましたけれども、ここで私の方から、パネラーの皆さんに改めて疑問点、ここどうなのかなということについての質問をさせていただきたいと思います。

まず第１点目は、祈祷札が２つある、ともに慶長16年ですね。１つは真言系だろうと考えられる。もう１つは大山寺、これは天台系ですね。この相対するものが、当時両者の仲が良かったかわかりませんけれども、なぜ２枚あるのか。ほかの建物では、祈祷札も棟札と同じく大事なもので、同じような役割をしているということで上げられているものはすべて１枚なんですね。なぜ松江城だけ２枚なのか。その辺について何かお考えや御意見があればお伺いしたいのですが。

稲田　信氏

なぜ２枚かというのは非常に難しい点ですね。宗教的な背景が祈祷札にあって、そういう宗教的な背景をもってこの天守や松江の城下町全体が守られていて、そのことに真言宗が大きな役割を果たしたという意味は非常によくわかりますが、その天守創建のときになぜ２大宗教ですね、その両方に祈祷をお願いしたのかは、一番核心の部分ですけど、今のところは残念ながらわかっておりません。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。では、卜部室長、どうぞ。

卜部吉博氏

今、稲田室長が言われたとおりで、これはもうわかりません。わかりませんが、先ほど申しまし

たように、大山寺という言葉が出てきているのが味噌だと思うんですよね。真言密教と天台密教で、両方とも密教なので、本来はどちらか一方でもいいようなものなんですけども、天台の方では、島根県、出雲の国には大きな２つの天台寺院があります。それは鰐淵寺と清水寺です。この二つの寺は尼子の時代に先座論といって、どちらが富田城で上座に座るかで、本山比叡山も交えて大きな喧嘩をしたという経過があるわけですけれど、そういう２寺を差しおいて、大山寺が入ってきているというのは、確かにそれは別格本山ではありますが、これはもう徳川幕府との関係しかないと思うんですね。

ただ、天台宗については、堀尾氏にとっては、ちょっと付け加えただけみたいなもの、と言うと失礼ですけど、本来は真言宗に帰依していたわけですから、徳川幕府との関係を強化したい、また良好な関係を取り持ってもらいたい、多分そういったことを、大山寺を通じて伝えたいという思いがあったのではないんでしょうか。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。慶長年間というのは、皆さんご存じのように関ヶ原の戦いがあって、それに連なって豊臣と徳川が後に大きな争いを繰り広げる混沌とした時代です。慶長時代に各大名は、自分の領地を守るために城郭を拡張するわけで、慶長年間には全国に天守が確か25も建ったという記録も残っているようであります。

そういう世の中の背景を巧みに堀尾氏は読み取って、一方ではその真言に、一方では徳川に関係する天台の方にも、いわば両方位の外交をしたのではないかと私は思っているんですが、祈祷札が２枚あることについて、どういうことが考えられるのか、それを一つ一つ確認していく作業をこれからも続ける必要があると考えています。そういうことで、ただ単に慶長16年の祈祷札が松江城のもので、天守がそのころに建ったということだけではなく、まず社会的な背景と言いますか、その時代の背景まで含んだ大変重要な意味を持つものかも知れないものであると思います。パネラーの皆さん方の更なる研究に期待したいと思います。

それから、私から和田先生に質問をさせていただきたいのですが、皆さんに配られました『御城内惣間数』、これは明和期の記録ですけれども、なぜこの時期にこういうものが残されたのかということと、それから奥書のところに附箋がついていて天明７年の記述があるわけですが、この貼紙があるということについての意味ですね。それをお話しいただきたい。それが１つ。もう１つは、先ほどの報告にあった昭和の修理報告書に記録されている梵字が書かれた木札についてですけれども、「大般若経札」と同様に創建当初のものだというふうに考えて間違いないだろうという解釈をされていますけども、その中の１枚、修理の時のものと考えられる木札については、いつ頃のものとお考えになっているのですか、その二点についてお聞きします。

和田嘉宥氏

『御城内惣間数』がまとめられたのは、明和３年です。明和３年といいますと、不昧治郷が藩主になる前年で、藩政改革が行われる年ですが、恐らくこの頃にこのようなものを改めて写し直そうとしたというふうに考えます。先ほどご紹介した『御城内惣絵図』は享保４年頃につくられたものだと私は考えていますが、『御城内惣間数』の最初の方の貼紙に記されている「御天守のふな形」と関連させてみますと、実は『御城内惣絵図』を作成したのは、斎田彦四郎という御大工です。斎

田家の「列士録」には享保５年に『御城内分限絵図』ができたので、斎田彦四郎は褒美をいただいたということが記されていて、恐らくこれと『御城内惣絵図』とは同じものと考えます。それから、享保３年には、斎田彦四郎は御天守の小形、つまり模型をこしらえていて、それでも褒美をもらっているということが記されています。もしかしたらこの頃に、竹内右兵衛が作ったとされるものとは別の小型の模型が作られて、それがここに記されたのかもしれないということです。こうしたことが示すように、この頃18世紀前半頃には、天守を見直そうという状況があったのではないかというふうに見ています。

そうして、天明７年という時期には、天守に関する記述が、史料にはなかなか出てきませんが、やはり不味治郷の時代で、この頃は結構安定した時代ですので、今一度、天守をきちんと見直そうという意識が出てきたのではないかというふうに考えています。

それから奥書のところの貼紙に「御天守四重目并塩蔵ニ大般若札云々」と書いてあることについて、どうして四重目と塩蔵なのかということは実際にはよくわかりません。

ただ、四重目というのは、天守の中でも一番天井が高く、面積も広い空間で、中二階もあったりします。その上の最上階は「天狗の間」という特別な言い方もしていますけれども、もしかしたら、この四重目も天守にとって非常に大きな役割のある空間ではなかったかというふうに考えておりまして、そうしたことから、四重目だったのではないかというふうにも推測しております。それから、実際にどうして天明７年なのかはわかりませんけれども、藩政が安定した時期で、三の丸の整備もほぼ終わった段階でもあることから、今後は天守のここを注視していこうということで、わざわざ天明７年にこうした貼紙を付したと理解できるかなというふうに考えています。これはまだ推測の域を出ませんので、これからも、いろいろな史料を踏まえて検討していきたいと思っています。

亀井伸雄氏

修理の時のものと考えられている木札についてはいかがでしょう。

和田嘉宥氏

記録を見ますと、天守の修理は寛保３年頃にいったん終わっていますが、これも確実な年号は記録されていないのでわかりません。けれども、その頃の修理は３階以上に集中していますので、修理の木札もそういった時期のものではないかというふうに推測できると思います。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。

それでは、西先生にお伺いしたいのですが、先程のお話で祈祷札について３つの疑問が残っているっておっしゃいました。それで３番目の祈祷札のあった場所について、文献にある４階と塩蔵にあったという記述との相違点について、何か心当たり、あるいはお考えになっていることがあればお聞かせいただきたいと思います。非常に難しい問題でしょうけれども。

西　和夫氏

難しいので、答えはわかりませんということです。

亀井伸雄氏

和田先生のご研究で『御城内惣間数』には４重目と塩蔵にあると書かれていることが確認されました。これはこれで事実だと思うんですね。城戸久先生は『佛教藝術』に書かれた論文に４階で確

認したとされています。この場合、４階にはフリーで置かれていたのか、釘で打ちつけられていたのか。多分フリーではないかと思うのですが、そうであれば、元の場所から外して持っていった可能性がある。あるいは全く別物なのかも知れない。どうでしょう、３枚目の存在についてはいかがですか。可能性として。

和田嘉宥氏

いや、わからないですよね。

亀井伸雄氏

例えば通常打ち付けますと、棟札などの場合には棟木にほとんど置いてあるのが普通ですけれども、祈祷札でも民家とかでは、上の方に置いたままにされるというのが通常です。この場合は、打ち付けられたのは確かなんだけども、ある時期外されたのですかね。それで後に４階に移されたということでしょうかね。

和田嘉宥氏

やはりこの時点では、四重目にあったと理解していいのかなと思います。四重目は修理されて部材の多くが交換されているようですので、打付け位置を確認することはできませんけれども、貼紙には四重目並びに塩蔵と記されていますので、四重目に大般若札があったということは、史料からも確認することができるわけです。

ただ、今回、塩蔵で確認されたようには、これがどの柱にあったのかは、わかりませんが、もしかしたら４階には中二階がありますので、そこにあったのではないかなというふうな思いを持っています。

亀井伸雄氏

それから先ほど、西先生が１、２階の部材の様子、あるいはその番付等の様相が３、４階とは明らかに違うと言われました。その辺の違いの背景について具体的に何かございませんか、西先生。

西　和夫氏

これははっきりした根拠は、今のところはまだ提示できないのですが、考えられる一つは、１、２階の部材は、地階を含めて、富田城から持ってきた可能性が高い。それに上の階を、松江の現地で集めた部材を使って乗せたのではないかと、こう考えているのですが、まだこれは推測の段階です。

和田嘉宥氏

天守の改修などが、ほぼ40年間に渡って行われていますので、もしかしたら、３重目以上を改修したときに、４重目もやはり相当な意気込みをもって改修に取り組もうとした。そうしたことがあって地階にあったものを、この頃に四重目に移したということが言えるかもしれません。そんなことも推測できるかなと考えています。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。卜部室長、どうぞ。

卜部吉博氏

今回の祈祷札についてですが、少なくとも城戸先生の論文に残されている写真を見ますと、「如意珠経」札については、多分今回見つけたもの、そのものだと思うんですね。それは釘穴の位置が同じ位置にありますので、恐らく地階の柱に打ち付けられてあった祈祷札が、４階に置かれたのだ

と思います。ですから、今回私どもが打ち付け場所を探しだしたこの祈祷札が、城戸先生が４階で確認されたものと同一である可能性は高いと思います。

亀井伸雄氏

この祈祷札を巡ってはいろいろな疑問点、あるいは推定の域を出ないようなこともありますけれども、それだけにこの祈祷札の位置付けというものが重要であるということを御認識いただければと思います。

それでは今度は、それぞれの専門から見てのお考え、あるいは自分はこう思うんだけど、どうだろうかというところをお互いにディスカッションしていただければと思います。文献から見た建築、あるいは建築から見た文献、また、社会的な背景からするとこういうことが言えるのではないかというようなことがあれば、お互いに質問や議論をし合っていただければと思います。よろしくお願いします。

卜部吉博氏

和田先生にお伺いしたいんですが、今日のご報告の中で、別の祈祷札のお話がございました。木札というようにおっしゃったんですけども、私は、あれは朱で書いてある木札で、真言の木札だと考えておりますけども、実は松江城国宝化推進室の方で赤外線写真を撮って、元興寺文化財研究所の先生に見ていただいたんです。多分真言のものだということで高野山大学まで行って調べていただいたんですけども、そこで問題になるのが、あれが創建時のものかどうかですね。その辺りをお伺いしたいと思います。

実は、次のこういった報告会のテーマにしようと思っているんですけども、祈祷札、あるいは祈祷の様態というのが、今、松江城の築城に関しては３つわかっているんです。１つは、今回の報告会のテーマでもある２枚の祈祷札。もう１つは、和田先生が言われた木札で、このくらいの板に朱で書かれた、天守の中に打ち付けてあった祈祷札。もう１つは、昭和の修理のときに出ているんですけども、地階の大根太の下から出た槍と、それから石製の丸い球体と木札。実は地階の大根太の下からも木札が出ているんです。解体修理工事の報告書には、もうばらばらに割れていて、字は読めないと書いてあるんですけが、肉眼ではっきり見える部分もあります。これも県の文化財課の協力で赤外線写真を撮っていますが、ただ、割れていますので、何が書いてあるかはよくわからないんです。

以上が現在わかっている祈祷の３態です。その中で一番古いと考えられるのが、大根太の下から見つかったものです。根太の下にあったわけですから、これは地鎮のときの祈祷だと思うんですね。「雲陽誌」によりますと、千手院が地鎮を行ったということが書いてありますから、多分そのときのものではないかと考えていますが、まだいろいろ調査研究をしていく必要があると思っています。ただ、これと先程の朱で書かれた祈祷札がどういう関係なのかについて、先生のお考えを伺いたいと思います。

和田嘉宥氏

この木札については、修理工事報告書に地鎮の祈願文というように記されていますけども、松江歴史館にあるこの木札に関する史料には、地鎮鎮宅というように記されていますので、むしろ鎮宅に関わるものではないかと思います。それで、このような木札について、先ほどの報告の中で１件

だけ紹介しましたけれども、例えば住宅の場合には、屋根裏の鬼門に当たるとか、それぞれの方位ですとか、そういう所に上げられているようですので、地鎮の時にではなくて、むしろ建物を造っている最中、あるいは棟を上げる前の段階の時に屋根裏に上げたものだというふうに理解しています。だから、これらは、建築の途中の段階のもので、鎮宅というのは、建築期間中に行なわれたというふうに考えているところです。

亀井伸雄氏

ありがとうございました。ほかの皆さん、何か今後の研究のために聞いておきたいということがありましたらお願いします。

特にないようであれば、先ほど卜部室長から、松江神社は慶長16年にはなかったというふうにお話がありましたけれども、皆さん既におわかりだと思いますけれども、松江神社が今の城内に建ったのは、歴史的には極々浅い段階であります。この際、今回見つかった祈祷札と松江神社が無関係であるということをはっきりさせるために、松江神社の来歴などについても、確認できればと思います。この点について稲田室長さん、ご説明をお願いできますでしょうか。

稲田　信氏

松江神社は、明治32年に新たに現在の城山の中に移されて、松江神社として遷座されたものです。その前身は、楽山神社、現在の松江の楽山ですね、そこにあった神社になりますが、この楽山神社自体も明治10年にできた松平直政を祭神とする比較的新しい神社ですが、この楽山神社と松江の東照宮が合祀されたものです。少し複雑なのですが、この東照宮というのは寛永５年、1628年に堀尾忠晴、これは堀尾吉晴の孫に当たりますが、堀尾忠晴が徳川家康を祭神として、現在の松江市西尾町に建てたものです。仮に松江神社の方に東照宮の棟札あるいは祈祷札等が入ったとしても、東照宮ができ上がったのは寛永５年、1628年でございますので、慶長16年の祈祷札というのは東照宮の造営よりも古い年号だということは明らかなわけです。

ちなみに、先ほど亀井先生の方から、なぜ２枚の祈祷札があるのかという質問がありましたが、私もお答えできませんでした。ただ、実はこういうこともあるなということをご紹介しておきたいと思います。東照宮というお宮には、圓流寺という非常に格式の高いお寺があわせ建ちます。この圓流寺は、東照宮が建つ寛永５年頃に、出雲の国の鰐淵寺の僧侶の豪教という人物が開山したものです。

堀尾忠晴は吉晴の次の代にはなりますが、やはり先ほど徳川家との関係ということで天台宗との関連も出てきましたけれど、やはり領主がお寺をつくるときには天台宗のお寺を建てるということがあるようです。天台宗とのつながりも堀尾氏は非常に強かったということで、そういう意味で、松江城天守に関わる祈祷が行われる場合は、真言だけではなくて天台もというのは十分に考えられるのではないかと思います。少し時代は違いますので、そういう事例もあるということもあわせてご紹介しておきます。

亀井伸雄氏

どうもありがとうございました。それからパネリストの皆さんには、今後の調査について、何かこういうことをやってみたい、またこういうこともやらなければならないというような点があれば、ぜひご披露いただきたいと思います。

いろんな史料が出てきてまだまだわからないことだらけで、ますます謎めいてきたというようにも見えますけれども、真実は一つであります。その真実を見出すために考えられるいろいろな調査もしなければなりませんし、何よりも大切なのは、こうやって出てきた史料が確実に保存されていくということだろうと思います。今の研究者だけでなくて、後々の研究者が史料を自由に活用できるような環境をつくっていくことも我々の使命として大事だろうと思います。その点も念頭に入れながら、こういうことが必要であるということがあればぜひお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

和田嘉宥氏

私は、市史編纂の方でも松江城に関わっていますが、松江城について思うのは、天守は確かに重要なものですけれども、やはり松江城全体が、堀尾時代から松平時代の間に、どのように変わったのかということに大きな関心を持っています。それで今、本丸、二の丸、三の丸が、どのような変遷過程を経たのか、また松江城の中でどのような位置付けを持っているのかについて調べていますけれども、やはり、なかなか史料が出てきません。ただ、今日紹介した幾つかの絵図、城郭図、それから『御城内惣間数』というような史料がありますので、それらを総合的に検討して、松江城はどう変わってきたか、あるいはどこが変わっていないか、変わったものと変わらないものが確かにあるはずですから、それをきちんと見極めたいと考えています。それで、今回、三の丸で石垣が出てきてニュースになっていますけれども、これも絵図などを見ますと、あの位置にちょっとした池が描かれたりしますので、それらがどのような関わりをもつかも新しい問題だと思います。三の丸がある程度、早い時期にきちんと整備されたと考えられるかも知れないということで、そのあたりも非常に課題が多くなってきたと思います。

いずれにしても、やはり今日も西先生が言われましたけども、松江は城下町全体を大切に考えなければなりませんが、その中心である松江城について、その中でも、本丸、二の丸、三の丸の位置付けというものをきちんと調べなければいけないと思っています。これからもいろいろな史料の収集に努めて、検討していきたいと思います。

それで今回、『松江城研究第２号』の中でも、松江城の推移について史料を踏まえて検討していますので、またご覧いただければと思っています。

稲田　信氏

私が所属しております松江市の史料編纂室では、松江市史の編纂事業を行っております。平成30年までございますけれど、この中で古文書調査等を幅広くやっております。大変地道な作業ですけれど、こういった地道な作業の中で結果的にこういうふうな祈祷札の発見というものがあって、大変貴重な情報提供ができたということでございます。やはりこういう基礎的な調査にこれからも地道に取り組んで、資料が集まりましたら、松江歴史館という立派な博物館もございますので、そういう所で保管していきたいと考えております。

それから、特にこの松江城に関しては、松江市民、あるいは行政も非常に大きな期待を持って取り組んでいるところでございますので、特に来年度からは松江城に関する文献史料調査ということで、活字化されたもの、あるいは古文書等で松江城に関するものを集中的に、集めていきたいと思っております。そういった史料調査をできるだけ幅広く、これからも続けていきたいと思っております。

卜部吉博氏

松江城国宝化推進室では、去年も松江歴史館と共同で雲南市の大東まで史料調査に出かけてきました。松江藩のお抱え大工だった馬場家の史料を調査することができまして、松江城のいわゆる中原口の柵門の図面などを見つけることができました。懸案の大手門の図面は出てこなかったんですけども、こういう新たな調査によって、いろいろな新たな史料を見つけていくということもやっていきたいと思います。また先ほど言いました祈祷札の３態と３様の祈祷のあり方みたいなものについて、もう少し詰めて、元興寺の先生方のご協力もいただきながら取り組んでみたいと思います。あの祈祷札は梵字で書いてありますが、元興寺文化財研究所の先生は梵字のご専門ですので、その辺りもしっかり取り組みたいと思います。それからもう一つの大根太の下から出てきたという祈祷札についても、もう少し研究を進めていきたいと思っております。特に石丸、修理工事報告書には石の塊って書いてあるんですけど、私は多分、松江歴史館の発掘調査で出てきた埴丸と同様のものではないかと考えておりまして、石塊と書いてあるんですけど、実はつるつるした泥を丸めたものだったじゃないかなと思います。それで、大根太の下から出てきた祈祷札と槍は残っているんですけど、その石だけが残っていないんです。乾燥してばらばらになって、結局残らなかったんじゃないかと思いますけど、その辺のところも調べていきたいと思っております。

西　和夫氏

調査はまだ中途段階であるという話を亀井先生がなさいましたけれども、これからやらなければいけないことはたくさんありますが、少なくとも次の２つだけは急いで、そして力を入れてやっていってもらいたい。

一つは、今まで何回もお話ししました昭和修理の記録、これは松江城の中にあったものと江津にあって井上梅三工事主任が残されたものがあって、私どもの調査で随分使ったのですが、広くご覧いただけるような形にすべきだろうと考えます。非常に貴重な資料ですが、ただ読みにくい。もうばらばらになりそうで扱うのも難しいですので、それを広く読んで使っていただけるような形にしていきたい、これが一つです。

それからもう一つは、今日、話をさせていただきましたけども、天守だけ大切にすればいいのではない、お城だけ大切にすればいいのではない。これを町全体の中に位置付けて、町全体の歴史や文化を大事にしていく、このことがとても大事だと考えております。先程市長さんとも、具体的にはどうするのかというお話をさせていただいたのですが、例えば私は建築が専門ですから、建築に限ってお話ししますが、町の中には歴史的な建物、優れた歴史的な建物はたくさんあります。これには、市の担当者がお気付きになっていて、それに対する対策はもう打っておりますとおっしゃるけれども、具体的になかなか動き出すのは難しいようです。しかし何もしないでいると、そのうちにどんどん消えていきます。町の変化は激しいですし、個人所有のものは、代がわりのときに維持が大変難しいというようなことがあって、どんどん消えますし、町は生き物ですから大きい建物が次々と建っていきます。そうすると、松江という歴史豊かな町の様子をこのまま維持していくのは、大変難しいという状況がどうしても出てきます。

ですから、緊急に町全体の現状調査が必要だと思います。私自身も、半日ほど歴史的な建物を見て歩きました。それを地図上にプロットしてみると、こんなにたくさんあるのだということがわか

ります。そういう作業を緊急にやる必要があると思っていまして、そのことを、もし機会がいただければぜひやりたいと考えています。町全体を視野に入れて天守も見ていきたいということです。

亀井伸雄氏

西先生も、これで調査を終えるのではなく、まだまだやらなければならないことがたくさんあるのだということですね。

ここで、せっかくですので、会場から何か質問等があればお聞きしたいと思います。

会場発言

松江城を国宝にするには私たち市民が正しい理解をすることが必要だということ、よくわかりました。それで、先生の方から一例として、天守の柱は寄木柱ではないとのお話がありました。これは数年前から正しくないと言われていることですが、正しくないと言いながら、私どもがお客さんに紹介するビデオがありまして、その中では今でも松江城の天守の柱を寄木柱と説明しています。それで、正しくないことを説明するというのは、お客さんに間違ったことを伝えることになりますから、やっぱり松江市には、そういう間違った説明をしないように修正していただきたいと思っています。

亀井伸雄氏

それは行政の役目だと思いますが、行政だけでなくて観光関係の団体ですとかいろいろな組織があると思いますので、そういうところに行政の方から正しい情報が伝わるようにしていただければ、徐々に改善されるのではないかというふうに思います。

ほかにありませんか。

会場発言

西先生にお聞きしたいのですが、現在12城残っている天守の中で、国宝は４城だったと思うんですが、こういう考え方が妥当かどうかわかりませんが、国宝の認定されるための要件というんでしょうか、こういう条件があれば認定になるというか、そういう要件があるのかということ。それから、今お聞きしていた中で、どうも昭和の修理等でかなり改変が加わっているようだという具合に受け取ったのですが、結局創建当時の状態じゃなくて、かなり改変がされているということになると国宝から外れるのか、そのあたり、国宝の要件として足らないものは何か、あるいはこれがあるからマイナスだという、そういう点はいかがでしょう。これが結局、国宝化に向けての現状での方向性になるのかなという気がしています。なかなか単純に数学的にはいかないと思うんですが。

西　和夫氏

今、ご質問を受けましたが、この点は亀井先生の方がお詳しいですから、私がまずは話をした後で補足していただきましょう。国宝の条件は、重要文化財の中の特に重要なものということで、それ以上に具体的な要件が一つ一つ書き上げてあるわけではありません。総合評価とでも申しましょうか。ですから、これをやれば国宝になるというマニュアルはありません。それは逆にいうと、これが欠けているから国宝にならないんだという、そういう明確なものも掴みにくいということです。

亀井伸雄氏

法律的な観点から言いますと、文化財保護法第27条に、文部科学大臣は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、類ない国民の宝たるものを国宝に指定することができる、と

されているだけです。それで、指定基準というのが別に告示としてあるんですが、国宝については、重要文化財のうち極めて優秀で、かつ、文化史的意義の特に深いものということで定義されています。だから、具体的にこうだということではなく、漠とした総合評価ということになるわけです。

また、重要文化財の指定基準として、建造物に関していえば、各時代または類型の典型でありかつ、意匠的に優秀かどうか、技術的に優秀かどうか、歴史的価値の高いものであるかどうか、学術的価値の高いものであるかどうか、流派的または地方的特色において顕著なものであるかどうか、そういう５つの基準があります。そういう基準にかなったものが重要文化財ということで、国宝は、その中で極めて優秀で、かつ、文化史的意義が特に深いということになります。ですから、例えば祈祷札そのものに関する社会的な背景ということがあって、当時の慶長時代の築城の要件として、武将たちがこういうことを考えていたということがわかるのは松江城しかないということであれば、これは文化史的にすごいということが言えますね。だから、そういう研究を一つ一つ積み上げていくということが必要となります。

その結果、仮に国宝にならないとしても、それは決して無駄な努力ではありません。むしろその間の調査や研究が蓄積されて、また次の世代の研究につながっていくわけです。松江の歴史というのはこういうふうにあったのだと、それは日本の歴史、築城の歴史、慶長時代の社会的な特色、それをよく現しているのだと、それが松江城であり、祈祷札なんだと胸を張ることができると思います。そういう視点に立ってお考えいただければいいかなと思います。

どうして今、この時代に国宝を目指すのかということに対する答えとしては、ただ築城から400年を記念してということだけでは、なかなか難しいですね。学術的な判断は既にくだされてしまっているわけで、それをまた覆すだけの新しい価値が見出せない限りは、文化庁の方は文化審議会の先生方に了解していただけるだけの自信はない、大変厳しいと判断すると思います。非常に厳しいハードルがあって、それをクリアしたものだけが国宝になるということです。

現在、建造物の国宝については、近世の社寺建築を中心に考えようとしています。つまり、江戸時代を前後して造営された社寺についての全国調査が一通り終わりました。その中で類型の典型、あるいは時代の特色云々で幾つか選んできているところです。大半のものは、戦前までに指定された物件の中から選ばれています。ところが、近世社寺調査というのを昭和42年ぐらいから10数年かけて調査しましたけれども、唯一、埼玉県の歓喜院聖天堂ですね。これは庶民が30年、40年かけてつくり上げたもので、彫刻彩色が凄いわけです。日光東照宮の彫刻を想起していただくといいのですが、特色ある近世彫刻が、庶民信仰の一つの証としてつくられたということが評価されまして、２年ほど前に国宝になった例があります。これは、近世社寺建築の全国調査の成果として出てきた唯一のものです。500以上の未指定の建物を調査した中で、初めて国宝が生まれたということでありますので、いかにこのハードルが高いかということがおわかりいただけるかと思います。

それと、最近では、明治時代以降の近代建築についても、順次国宝を考えていくことも話題に上がっております。昨年、旧東宮御所、かつて赤坂離宮とよばれ、一時は国会図書館として利用された建物で、今は迎賓館と呼ばれている建物ですが、東京赤坂にありまして、片山東熊という宮廷建築技師が設計した日本の本格的な洋風建築、これが近代建築としては初めて国宝になりました。でも、その背後には、数百の近代の建物がございます。その中で、本当にこれが意匠的にも歴史的に

もトータルの意味で価値がある、抜きん出て高いということで国宝になったわけです。

お城に関しては、４つ国宝があるということは皆さんご存じだと思いますが、姫路城、これは世界遺産になっております。彦根城、これも世界遺産の候補にはなっています。それから、松本城と犬山城ですね、これらは歴史的な経緯がありまして、形式的には層搭型、望楼型と言われますけれど、各時代の中でこれが典型だというように位置付けられています。松江城にはそれを凌駕するだけの価値付けができるかどうか、これが勝負だと思います。

松江市では、先頃、西先生が松江城の天守を調査された報告書を発刊されました。そこで全国の天守の類例調査をされた中で、松江城の特色ということが載っております。これを十分に理解された上で、だったらこういうことも考えられるのではないかと、市民挙げて知恵を出し合って、新しい価値の発見に協力していただければというふうに思います。

先ほど史料編纂室の稲田室長が、地道ではあるけども、文書調査、文献調査をしていきたいと言われましたが、恐らくこの会場に来られている方々、お家の蔵には自分も知らないような何か貴重な史料があるかも知れません。もしそういうものを発見された場合には、史料編纂室の方に相談していただいて、そこからまた新しい史実がわかるかも知れませんので、調査に対して協力していただければというふうに思っております。

教育委員会の方にお願いしたいのは、西先生も言われたように、昭和の修理記録、これが非常に重要な意味を持っています。それから廃材を使って建てたであろう休憩所、あるいはそのほかにもあるのかも知れませんが、そういった建物を、例えば城内の整備をするような場合に、もう不要になったということで廃棄するのではなくて、一つ一つ古材かどうかを確認した上で、必要に応じてその価値を調べる機会を与えていただければと思っております。

西先生には、非常に頑張っていただいておりますので、これからも継続して調査に取り組んでいただくようお願いしたいと思います。これは私からのお願いでございます。

皆さん、ほかに何か質問ございますか。

会場発言

今日の議題とは少し離れるかもわかりません。大手前にある看板でも説明してありますが、松江城も廃城になるということで、明治８年ですか、天守も入札にかけられて、当時180円で一旦は落札されました。その頃の写真を見ますと、屋根も大きく崩れたりしていまして、それをその後、明治時代にも修復されたはずですが、そのときの資料が残っているのかどうかについて、一つ質問させていただきたいと思います。

昭和でも大変難しい工事だったと考えますが、その前、明治時代にも年次的に何年かおきにとか改修されたものなのか。そういった資料は残っているのでしょうか。

それから、これは質問ではありませんが、先ほどから国宝の件が出ております。市民運動ということで、平成22年に署名活動をやっていただいて、約13万人分ですか、集まったと聞いております。私も個人的に650名くらい集めさせていただきまして、その約13万人分を文化庁の方に提出されたということは新聞紙上で読みました。ただ、その後余り活動がないように感じております。個人的に協力させていただいて、県外の人にもかなりお願したんですけど、ほとんど誰も知らなかったんですね。だから、この開府400年祭にあわせた署名活動は終わったんですけど、引き続いて何かも

う少し取り組んでいただければというふうな感想を持っております。以上です。

亀井伸雄氏

これは和田先生にお願いします。どうぞ。

和田嘉宥氏

明治に修理をしたという記録はありますが、具体的に史料で確認するところまではいっていません。ただ、確かにそういったことをしているようですので、結構朽ちかけていたものを相当しっかりと直しています。屋根の修理を大がかりにやっていますので、記録が残っていてもいいはずですけども、まだ見つかっていません。これやはり市を挙げて、特に明治以降の写真以外の史料もまだまだあるかと思いますので、そういったものをできるだけ探し出していただけたらと思います。

会場発言

先ほど言い忘れましたが、どうして入札がかかったかというと、建物に使われている金具がお金になるということでした。その金具は残ってないんですね。資料がなければわからないことかも知れませんが。

亀井伸雄氏

松江城のことはわからないですけど、例えば興福寺の五重の塔、あれは確か100円で売りに出されましたけども、目的は金目ですね。やっぱり金属の方は当時としては貴重なものだったということで、そこに値がついて入札になったと。結果としてはそうはならずに守られましたけれども。

稲田　信氏

これは、入札して落札した者が、松江城天守を解体して廃材を燃やして、残った金具をお金に換えるというための180円だったと聞いておりますけれど、実際は、先ほど亀井先生の例もあるように、松江城天守というのはそういう危機を免れておりますので、現在も天守の中にその金具がそのまま残っているという状況でございます。

亀井伸雄氏

ほかに質問等が特にないようでしたら、これで終了いたします。

今回、中間報告的な意味合いで、祈祷札を主題として皆さんにお話しいただきました。調査はまだまだ途上であると私は思っております。今後の調査に対して皆様には格別なご配慮をいただき、松江城の位置付けをより明確にするために、松江市を挙げて、いろいろな角度から調査研究を進めていただければと思っております。

それでは以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

※本報告集の編集にあたっては、発言の趣旨を変えない範囲内で加筆、修正した部分があることをご了承ください。

天守祈祷札の類例調査について　－丸亀城天守木札－

松江城国宝化推進室

はじめに

従来、現存12天守についての創建時の棟札・祈祷札類と確認されていたものは、文化７年（1810）銘の弘前城天守棟札２枚と万治３年（1660）銘の丸亀城天守木札[注1)]１枚の２件であった。このことは、棟札・祈祷札類に墨書された年紀によって、その築城時期を特定することができる現存天守が、今回祈祷札が再発見された松江城を加えても、僅か３天守であることを示している。

当室では、松江城天守祈祷札の再発見を受けて、これら棟札・祈祷札類の類例調査を実施することとしたが、弘前城天守棟札は、形状や形態、また作製年代や歴史的な背景において松江城天守祈祷札との類似性は低いと考えられた。[注2)]

一方、丸亀城天守木札は、松江城天守祈祷札との類似性が強く、比較研究の対象としての史料価値が極めて高いと判断し、今回の調査対象としたものである。

本類例調査は、松江城国宝化推進室が、平成24年12月20日（木）及び21日（金）の両日、丸亀市立資料館及び丸亀城天守において実施したもので、写真撮影、実測調査、史料調査、担当職員からの聞き取り調査が主な内容である。

本調査の結果は、第７回松江城調査研究委員会[注3)]で報告したものだが、本稿で改めてその調査結果を報告する。

丸亀城天守木札（平成24年12月20日、丸亀市立資料館にて撮影）

表面　　裏面

形状及び墨書に関する比較

丸亀城木札の類例調査の結果については、２枚の松江城天守祈祷札とともに３枚を比較表としてまとめた。[注４)]

形状はいずれも尖頭形を成し、３枚の札とも表面の中央に梵字と願文、向かって右側に年紀が、左側には吉祥日が墨書されている。

寸法も、丸亀城のそれは、松江城の２枚のちょうど中間程度の数値であり、概観の全体的な印象としては、非常に類似性が強いと言える。

願文は松江城の２枚には、それぞれ如意珠経の讀誦と大般若経の轉讀が記されている。如意珠経については不明な部分もあり、更に研究の余地があるが、いずれも経文を読んだことを表している。それに対し、丸亀城のものは真言系の密教行事である「七夜待大事」をおこなったことを示している。

梵字に関して、松江の「如意珠経」札のものは、バク・釈迦如来を表している。如意珠経[注５)]の本尊は如意宝珠であり、如意宝珠は釈迦の遺骨である仏舎利を表すとされている。また、「大般若経」札のジク・般若菩薩は、大般若経の本尊である。更に、丸亀城木札に記されている「七夜待」は、『望月仏教大辞典』[注６)]によれば、６観音（聖・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪）と勢至菩薩を７夜の本尊として祀り祈願成就を求めるもので、記されている梵字のサ・観世音菩薩も「七夜待」の本尊を表すと考えられることから、３枚の祈祷札に記されている梵字は、それぞれの宗教行為における本尊を表していると解することができる。

この梵字を中心に、以字点[注７)]が記されているのも３枚に共通しているが、松江城の２枚が左右の肩部に偏在しているのに対し、丸亀城木札では、正に梵字の四方を取り囲むように配されている。

設置方法に関する比較

松江城の２枚の祈祷札は、松江神社において再発見されたものであり、その経緯は不明だが、本来の設置場所である松江城天守から移されて保管されていたものである。

この２枚の祈祷札が、本来は松江城天守内にあったことは、和田嘉宥氏（松江城調査研究委員会委員、米子工業高等専門学校名誉教授）による「御城内惣間数」[注８)]の研究や、城戸久氏（名古屋工業大学名誉教授）が執筆された「松江城天守」[注９)]で確認することができる。

更に、松江城国宝化推進室が平成24年11月16日実施した打付け位置調査によって、これらが天守地階の東西２本の天守最大の通し柱に、上下２本の釘によって打ち付けられていたことが明らかになったのである。

それに対し、丸亀城天守木札は、昭和23年の解体修理工事の際に、天守最上階の南東隅の壁中に塗り込めてあるのが発見されたものである。

『棟札の基礎的研究』[注10)]によれば、祈祷札を含む棟札の設置方法による分類は、打付札、置札、懸札が一般的であり、特殊な事例として箱入札や建物組込札があることが紹介されている。同書は、主に甲斐国の事例を研究素材としたものであるが、丸亀城天守木札のような、言わば「塗込札」といったような例示はない。地域性による相違を考慮するとしても、丸亀城における設置方法が極めて希少な例であることが推察できる。

なお、塗り込め位置である丸亀城天守の最上階南東にはどういう意味があるのか。丸亀城の建つ亀山の南東方向には、讃岐平野を挟んで対峙するように、飯野山がそびえている。「讃岐富士」の

別名で知られる円錐形の美しいこの山は、古来よりこの地の信仰の対象であり、山頂の薬師堂には薬師如来が祀られている。丸亀城天守木札の願文にある「月光遍照」は月光遍照菩薩を表すと考えられるが、月光遍照菩薩は、薬師如来を守る脇侍である。

これらがどういう意味を持つのか。木札の塗り込め位置と関係があるのか。今回の類例調査においては、究明できなかった点である。

おわりに

丸亀城天守木札の類例調査により、この「木札」の実体が、まさしく松江城天守のものと同様に「祈祷札」であることが確認できた。

冒頭に述べたとおり、創建時の棟札及び祈祷札に記されている年紀をもって、その完成時期が特定される天守は、文化７年（1810）銘の弘前城、万治３年（1660）銘の丸亀城、そして慶長16年（1611）銘の松江城の３天守だけである。

弘前城天守棟札と丸亀城天守木札がいずれも重要文化財の附指定となっているとおり、その史料的価値は極めて高く、松江城天守祈祷札も平成25年３月29日に松江市指定文化財となった。

今回の類例調査は、現存天守に係る祈祷札を対象としたものであり、多くの共通点、類似点とともに、設置方法という大きな相違点があることが判明したが、今後は、記されている願文に着目し、建物の造営に関わる「轉讀札」や「讀誦札」の類例調査をおこなうことで、祈祷札に関する研究を更に進める必要があると考える。

謝辞

今回の調査に際して、丸亀市教育委員会総務課文化財保護担当長の東信男氏及び市立資料館の大北知美学芸員には懇切なご教示をいただくとともに、貴重な資料をご恵与いただきました。

また、弘前城天守棟札に関しては、弘前市都市環境部公園緑地課から資料の提供をいただきました。

本報告をまとめるにあたり、あらためて感謝申し上げます。

（文責　山本盛治）

注１）附指定の名称は「板札」だが、一般的には「丸亀城天守木札」の名称が用いられているため、本稿においても同様に呼称する。

注２）弘前城天守は、前身の鷹岡城天守が、寛永４年（1627）に焼失した後、文化７年（1810）に、御三階櫓として造営されたものであり、２枚の棟札には、いずれも「文化七年」に「御櫓」が「新規」に「造営」されたことが記されている。

その形状は、１枚は尖頭形だが、松江城、丸亀城のものと比べると縦横度が小さく幅広で、後年代の棟札の特色を強く現し、もう１枚の形状は横長である。

注３）平成25年３月５日（火）、都市センターホテルにて開催。委員長は西和夫神奈川大学名誉教授が務める。

注４）本稿の比較調査票は、平成25年３月５日開催の第７回松江城調査研究委員会での報告資料を一部修正のうえ掲載している。

注５）「如意珠経」については、安来清水寺の清水谷貫主から「如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪咒王經」の略ではないかとのご教示を得た。

注６）塚本善隆編『望月仏教大辞典第二巻』（1972年）世界聖典刊行協会

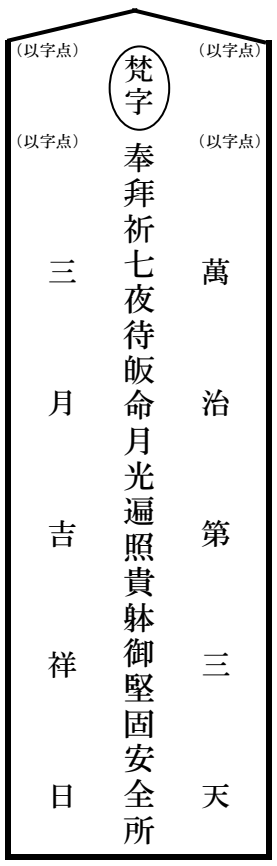
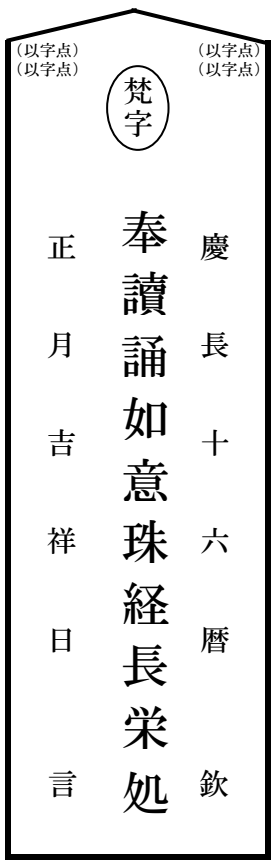
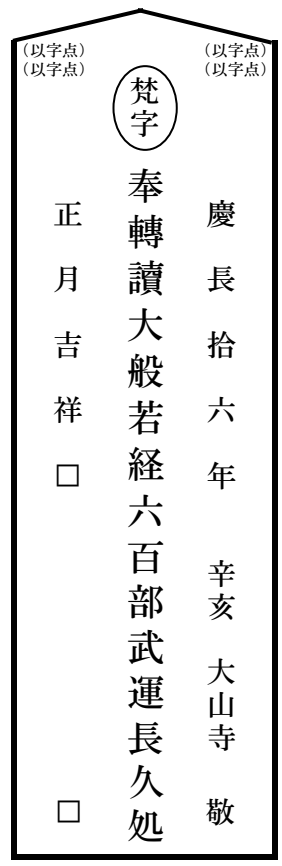
注７）「経の題箋または護符の上隅に付する〻点をいう。（略）水字とも、あるいは護世四天王を表すともいわれる。」（中村元著『広説佛教語大辞典』（2001年）東京書籍より）

注８）国文学研究資料館蔵。松平家より同館に寄贈された『出雲国松江松平家文書』に含まれるもの。奥書から明和３年（1766）に御破損方によって記されたことがわかる。

注９）城戸久著「松江城天守」『佛教藝術』60－特集山陰の美術－（1966年）毎日新聞社

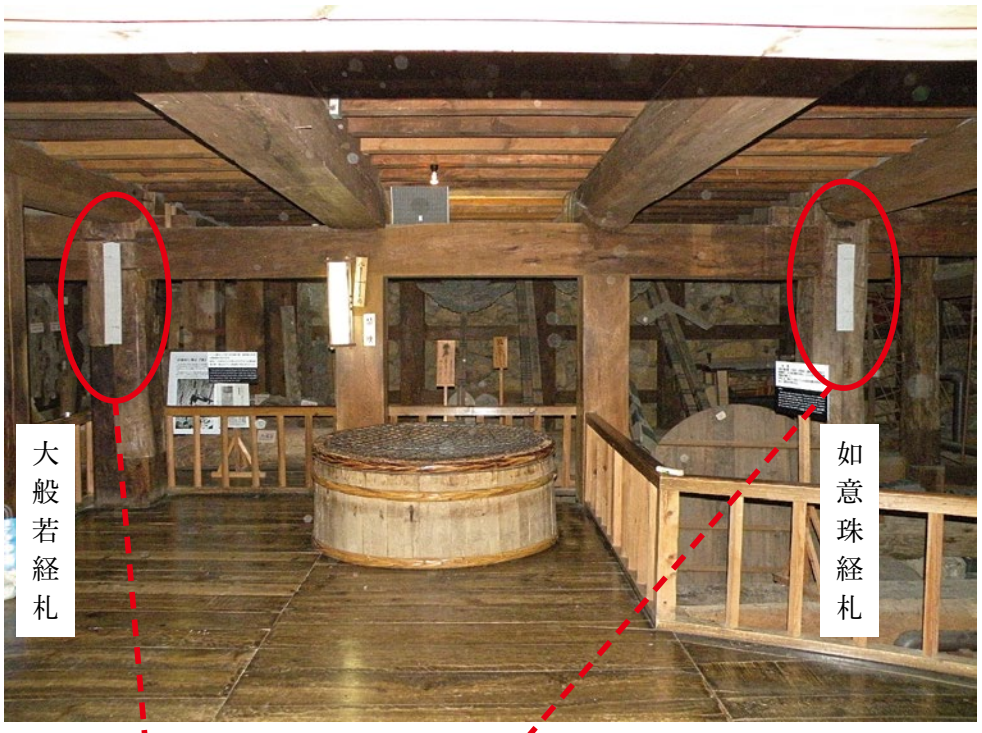
注10）秋山敬著『棟札の基礎的研究－主として甲斐国の事例を素材として－』（2010年）岩田書院

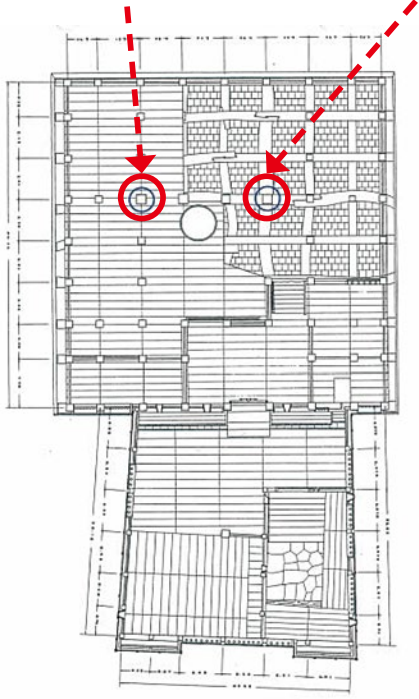
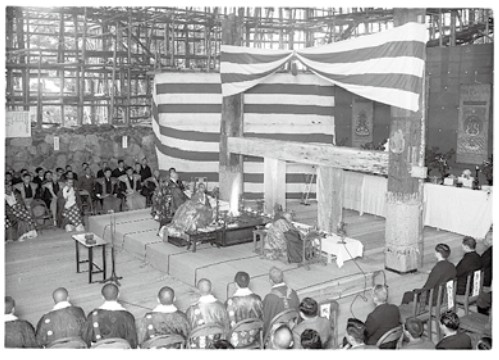
丸亀城天守木札・松江城天守祈祷札　比較調査票

区　　分	丸亀城天守木札	松江城天守祈祷札（その１）	松江城天守祈祷札（その２）
１．形状及び概観	尖頭形  ※裏面に墨書あり『三層南側壁（東面端）にありしもの』	尖頭形  	尖頭形 
２．寸法	総高　75.7cm 肩高　(右)75.2cm　　(左)75.15cm 上幅　14.0cm　　下幅　13.1cm 厚さ　0.6～0.8cm	総高　70.6cm 肩高　(右)69.9cm　　(左)69.7cm 上幅　14.2cm　　下幅　14.2cm 厚さ　0.7～0.85cm	総高　81.0cm 肩高　(右) 79.5cm　　(左) 79.7cm 上幅　13.5cm　　下幅　13.5cm 厚さ　0.5～0.65cm
３．材種	檜	杉	杉
４．仕上げ	台鉋か	鑓鉋痕あり	鑓鉋痕あり
５．切り欠き	無し	無し	無し
６．銘文の有無	表面のみ有り（裏面に発見時の墨書あり）	表面のみ有り	表面のみ有り
７．梵字	 サ＝観世音菩薩か もしくは マ＝大黒天か	 バク＝釈迦如来か ※如意（宝）珠は仏舎利を表すとされる。	 ジク＝般若菩薩か ※般若菩薩は大般若経の本尊とされる。 もしくは キク＝如意輪観音か
８．以字点 (四封：四天王)	有り：梵字の四方を囲むように配置 上下の間隔は約12cm～12.5cm	有り：左右の肩部隅に偏って配置	有り：左右の肩部隅に偏って配置
９．設置方法	塗り込め（壁中）	打付け（釘穴：上下２か所）	打付け（釘穴：上下２か所）
10．設置場所	三階（最上階）南東隅壁中	地階中央部東側最大柱	地階中央部西側最大柱
11．年代調査	未実施	・放射性炭素年代測定 未実施 ・年輪年代調査 解析できず	・放射性炭素年代測定 1496年～1644年以降（99.7%） ・年輪年代調査 解析できず
12．年紀との相関	【萬治第三天】⇒西暦1660年 慶長２年（1597年）：生駒親正が高松藩の高松城の支城として着工 寛永18年（1641年）：山崎氏による改修始まる 万治元年（1658年）：山崎氏無嗣断絶し京極高和入封 万治３年（1660年）：幕府より山崎氏未完の工事続行の許可。同年天守完成か。	【慶長十六暦】⇒西暦1611年 松江城着工：慶長12年（1607年） 松江城完成：慶長16年（1611年） 築城者：堀尾吉晴（藩主は忠晴） 『雲陽大数録』 「慶長五庚子年十一月、堀尾帯刀吉晴、関ヶ原ノ戦功ニヨッテ出雲国ヲ賜フ、（略）同十二歳丁未ヨリ普請始リ、同十六歳辛亥マテ五年ノ　間ニ城成就セリ」	【慶長拾六年辛亥】⇒西暦1611年
13．銘文に関する宗教的意味	【七夜待】 「七夜待大事」の略、「しちやまち」もしくは「ななよまち」。密教で、毎月17日の夜から23日夜までの７夜を、聖（しょう）観音・千手観音・馬頭観音・十一面観音・准胝観音・如意輪観音・勢至菩薩を毎夜の本尊として順次に祀り、祈願成就を求めること。天台宗系の不空羂索観音が除かれていることから真言宗系の密教行事か。 ※真言宗系６観音のうち准胝観音を除き不空羂索観音を加えたものが天台宗６観音とされる。 【皈命】 仏の救いを信じて身命を投げ出して従うこと。頭を地につけて　仏を礼拝し、帰依の気持ちを表すこと。 【月光遍照】 月の光を象徴する菩薩。薬師如来の脇侍を務め、日光遍照とともに薬師三尊を構成する。 （参考）月光菩薩＝シヤ	【如意珠経】 「如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪咒王經」（略して「如意宝珠金輪咒王經」）を指すか。「如意宝珠金輪咒王經」の本尊は如意宝珠。如意（宝）珠は仏舎利を納めてつくるとされ、仏教において様々な霊験を表すとされる宝の珠。「意のままに様々な願いを叶える宝」仏陀（釈迦）の入滅後に荼毘に付された遺骨、仏舎利を表すとされる。真言密教では、唐から高野山にもたらされた４千粒余の仏舎利が如意宝珠として伝えられており、如意宝珠法により修される。	【大山寺】・【大般若経】 鳥取県西伯郡大山町、天台宗別格本山奈良期養老年間開山、本尊は地蔵菩薩平安期に天台宗の統括となり、西日本における天台宗の一大拠点となる。戦国期に一時衰退するも、慶長年間に豪円僧正が座主となり中興を果たす。豪円の働きにより江戸幕府から３千石の寺領を安堵されるなど、幕府との結びつきも深い。「大般若経」の本尊は般若菩薩。
		大山寺の寺名から慶長16年正月吉祥日の祈祷の儀式に、天台宗大山寺の関与が強く窺われる。一方で堀尾一族の墓所が高野山にあること。松江城の鬼門、裏鬼門に真言宗寺院（千手院・報恩寺）を配置していること。千手院によって毎年正月に一年の安寧を願う祈祷が執り行われていたこと。天守建築の際に鎮宅真言の梵字の木札がおさめられていること。また、千手院によって地鎮の儀式が執り行われたことなど、松江藩は真言宗との関係も極めて深いと考えられる。	

丸亀城天守木札・松江城天守祈祷札　比較調査票

<table>
<tr><th>区　　分</th><th>丸亀城天守木札</th><th>松江城天守祈祷札（その１）</th><th>松江城天守祈祷札（その２）</th></tr>
<tr><td>14. 文献上の記述</td><td></td><td colspan="2">『御城内惣間数』（国文学研究資料館蔵）
「御天守四重目并塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥と有之関原御陣ゟ十三年目御城成就御祈祷と見ル」
『松江城天守』城戸久著（昭和41年４月30日毎日新聞社刊佛教芸術60）
昭和12年７月に同氏が松江城天守を実測調査した際に、本祈祷札２枚を天守４階で確認。
昭和25から30年の解体修理工事報告書に記載がなかったことから、昭和41年に写真付きで発表したもの。
「～ただ筆者は、昭和十二年七月、この天守を実測調査した際に、左のような祈祷札が四階に所在したことを見出している。二枚あって、当時一枚は読了できたが、他はかすかに慶長十六の記年が判読されるばかりであった。
～この祈祷札は恐らく古記に照らして、天守完成の時と認められ、それが慶長十六年（一六一一）正月であったことを確認させるまことに重要な資料である。～」</td></tr>
<tr><td>15. 文化財指定</td><td>重要文化財丸亀城天守附指定
（S25. 8. 29指定）</td><td>松江市文化財に指定
（H25. 3. 29指定）</td><td>松江市文化財に指定
（H25. 3. 29指定）</td></tr>
<tr><td>16. その他特記事項</td><td>※梵字については、「昭和63年度讃岐丸亀城研究調査報告書」（丸亀市教育委員会編）で「吉祥天」と報告されているが、後年の再研究により、「サ・観世音菩薩」もしくは「マ・大黒天」とされている。平成24年11・12月に開催された香川県立ミュージアム特別展『丸亀京極家－名門大名の江戸時代－』に出展された際の図録は、「最上部に記された梵字の「サ」は観音菩薩を表す。」とされた。
※寸法は平成24年12月20日、丸亀市立資料館での実測数値。「丸亀城の由来と天守閣修理工事報告略書」（昭和25年10月丸亀市）には、総高75. 8cm、上幅13. 9cmと記録されている。
※木札の頭頂部から縦に37. 5cmの割れが生じており、乾燥によるものか、全体に僅かに外反している。
※名称は、一般に「丸亀城天守木札」が使用されているが、附指定の名称は「板札」。</td><td></td><td>※年代調査は教育委員会文化財課が専門機関に委託し実施したもの。</td></tr>
<tr><td>17. 設置場所について</td><td>丸亀城天守最上階南東隅

昭和23年、天守解体修理に際して、天守最上階、南東隅の壁中から発見された。
修理工事報告略書には、「上塗が二回掛っている。」と報告されている。</td><td colspan="2">松江城天守地階塩蔵の間（入口附近から北方を望む）
 

（平成24年12月19日撮影）
 
該当の柱は、地階中央の天守最大柱２本（地～１階通し柱）で昭和の解体修理でも取り替えられることなく、旧材が使用されていることが、西委員長の調査で確認されている。
また、昭和の解体修理工事の地鎮立柱祈祷会（昭和26年11月29日）で使用された柱であることが記録されている。
模擬札を使用し、平成24年11月16日、12月19日の両日に打付け跡を確認。
 
昭和26年11月29日　地鎮立柱祈祷会風景</td></tr>
</table>

松江城調査研究集録１

平成25（2013）年12月

編集・発行　松江市産業観光部
観光施設課松江城国宝化推進室
〒690-8540
島根県松江市末次町86番地
TEL　0852-55-5594

印　　刷　㈲高浜印刷